

高野山大学密教文化研究所紀要 第9号
平成7年(1995)12月 抜刷

インド密教におけるプラティシュター

森 雅 秀

インド密教におけるプラティシュター

森 雅 秀

1. はじめに

プラティシュター (pratiṣṭhā) とは神像や仏像などの尊像、あるいは僧院、仏塔などの宗教的な施設が制作されたときに、その最終段階で行う儀式である。プラティシュターの訳語としては、尊像の場合は「開眼供養」や「安置式」、僧院などの建造物の場合は「落慶式」が相当するであろう。これらを総称して「完成式」とよぶこともできる¹⁾。

インドで仏像が制作されるようになったのは紀元2世紀ごろのことと考えられている。石や金属などで作られた仏や菩薩の似姿が、聖なるものとして礼拝や崇拝の対象となるためには、宗教的な意味をそれに与えるための特定の儀式が存在していたはずである。プラティシュターとはこのような目的のためにインド世界で広く実践されてきた宗教儀礼であると考えられる。

プラティシュターの対象となるのは尊像ばかりではなく、僧院や仏塔などの宗教的な施設、僧院の中の貯水池・庭園、教えを記した経典、念珠をはじめとする仏具などさまざまである。これらはいずれも宗教的な場面で用いられる装置や道具であり、日常的、世俗的な物質とは本質的に異なるものでなければならない。プラティシュターとはこのような宗教的な物質に意味を与える行為、聖性を与える手続きと定義することができる。

プラティシュターも他の密教儀礼と同様に、本来はヒンドゥー教徒が行ってきた儀礼を、仏教徒が模倣したものであろう。ヒンドゥー教におけるプラティシュターについてはいくつかの研究がこれまでにある。P. V. Kane は大著 *History of Dharmaśāstra* (1974) において、プラティシュターにひとつの章を費やし、内容の紹介、さまざまなパターン、成立と変遷などを示している。これに対し、仏教徒たちがおこなっていたプラティシュターに関する研究はきわめてわずかである²⁾。インド密教の時代にはおびただしい数の尊像が僧院の中におかれていたことが、当時の遺跡や遺物から知られている。これらの尊像も、またそれをおさめる建造物もかならずプラティシュターの手続きをふんでいたはずであるが、その実態はこれまでまったく知られていなかった。

ここではインド後期密教の代表的な儀礼文献である『ヴァジュラーヴァリー』(Vajrāvali) にもとづいて、その作者アバヤーカラグプタ (Abhayākara Gupta) が活躍していた11、12世紀ごろの仏教徒によるプラティシュターの儀式の全容を示し、その特徴をいくつか

指摘することにしよう。³⁾

2. 資料の記述

プラティシュターの儀式は、50の儀軌から構成されたVAの第16儀軌「尊格の招請に関する儀軌」(Devatādhivāsanavidhi)から始まる。アバヤーカラグプタは第15儀軌まででマンダラの制作過程を説明し終えている。VAは大きく分けて三つのトピックからなる。第一がマンダラの制作で、第二がプラティシュター、そして第三がアビシェーカである⁴⁾。マンダラはプラティシュター、アビシェーカの両者の儀式で用いられるため、まずはじめにその制作方法が説かれる。弟子のイニシェーションであるアビシェーカに関する儀軌はプラティシュターのあとにおかれている。

プラティシュターの儀式にアバヤーカラグプタは「尊格の招請」「尊像などのプラティシュター」(Pratimādiratīṣṭhā)「貯水池などのプラティシュター」(Puṣkarīṇyādīpra°)「庭園などのプラティシュター」(Ārāmādīpra°)の四つの章をあてる⁵⁾。このうち尊格の招請はプラティシュターの儀礼の準備段階に相当する。尊像などのプラティシュターでは尊像、僧院(vihāra)、仏塔(caitya)、典籍(pustaka)、念珠(akṣasūtra)などのプラティシュターが説かれる。とくに尊像のプラティシュターを基本にして説明をすすめる。そのほかについては尊像のプラティシュターとは一致しない点にのみ説明をくわえる。またここでは「簡略なプラティシュター」とよばれる方法にもふれ、プラティシュターを簡略に行う方法も紹介する。貯水池などのプラティシュターでは、貯水池、池、井戸がプラティシュターの対象になる。水に関する人工的な施設である。庭園などのプラティシュターではマンゴーの林などの園林のプラティシュターが述べられる。

プラティシュターは他の密教儀礼と同様、阿闍梨が中心になって行い、弟子が補助する。プラティシュターの対象を寄進したり、儀礼の経済的支援を行った施主への言及もあり、儀式に参加したことが知られる。

準備段階に相当する尊格の招請の部分を含め、プラティシュターの儀式の全体は次のように示すことができる。

A 尊格の招請

- A-1 三昧耶薩埵の生起と投華
- A-2 沐浴のマンダラの準備
- A-3 ニーラージャナ
- A-4 沐浴
- A-5 マンダラの家屋への移動
- A-6 智薩埵の招請と祈願

- A-7 三昧耶薩埵と智薩埵の合一
- B [狭義の] プラティシュター
 - B-1 九種のアビシェーカ
 - B-2 プージャー
 - B-3 開眼作法
 - B-4 乳粥等の施与
 - B-5 請願と帰依
 - B-6 お許し
 - B-7 ご帰還
 - B-8 バリ
 - B-9 施主による礼拝など

テキストからの引用をまじえながら、プラティシュターの儀礼の内容を順におうことにしよう。

(1) 尊格の招請

三昧耶薩埵の生起と投華

尊格の招請に関する儀軌の冒頭は次のとおりである。

つぎにそこで彩色マンダラか、布などのマンダラか、あるいは [行者の] 目に見えるようにした観想上のマンダラに対して、述べられたとおりのプージャーなどをはじめに行い、弟子のプラティシュターのように尊像などのプラティシュターも行え。

はじめにマンダラへのプージャーが説かれるのは、プラティシュターの儀礼にマンダラが必要であるからである。アバヤーカラグプタはこの直前の「マンダラの完成の儀軌」(maṇḍalasādhana-vidhi) までの部分で、地面に墨打ちをして、顔料を用いて描く彩色マンダラの方法を説いている。引用文に登場する「彩色マンダラ」がこれである。どの尊格を中尊にしたマンダラであるかは後で述べられる。その他に「布に描いたマンダラ」や、実際には作成せず、阿闍梨の観想したマンダラを用いたようである。「述べられたとおりのプージャー」とは「マンダラの完成の儀軌」のはじめに、顔料で描いて完成させたマンダラに対し、八種の香、尊格の衣裳、傘蓋、幢、旗、トーラナ、払子、滴瓶 (pūrṇaghaṭa)、バナナの葉を供えよという記述を指しているのであろう。⁶¹⁾

プラティシュターの開始を指示する「弟子のプラティシュターのように尊像のプラティシュターを行え」という最後の一節は注目される。VA の中には「弟子のプラティシュ

ター」というタイトルをもつ章は含まれないが⁷⁾、おそらくプラティシュターに続いてVAの中で解説される弟子のアビシェーカを指してこの語を用いているのであろう。実際、プラティシュターとアビシェーカという二つの儀礼の間には共通する要素が数多くある。これについては後で詳しく論ずる。

プラティシュターの儀礼は次のように開始される。

別のマンダラに対しても、先述の儀軌にしたがってはじめてに瓶の招請と設置を行い、空性からただちに種子などをすみやかに完成させた尊像などか、あるいは三昧耶薩埵の形をした、自らの胸の種子を想起し、赤い新しい衣などをかけ、花をつけ、その花輪を手にして、[プラティシュターの対象である] 尊像などをともなって [アビシェーカの時の] 弟子のように施主は彩色マンダラなどの、いずれかのマンダラに入れ。

「別のマンダラ」が具体的にどのようなマンダラを指しているのかは明らかではないが、前の段落であげられた「彩色マンダラ」などの三種のマンダラとは異なるマンダラ（たとえば実際に尊像を用いたマンダラ）を指すのかもしれない。これに瓶の招請と設置を行わなければならないという点から、少なくともVAのこれまでの章で述べられたプロセスで準備されたマンダラではないことがわかる。瓶の招請（kalaśādhivāsana）は第10儀軌で、瓶の配置（kalaśanyāsa）は第14儀軌において、それぞれすでに規定されているからである。これに続く部分はプラティシュターの対象内部での三昧耶薩埵の生起である。プラティシュターの対象を一度、空（śūnya）にして、種子（bija）からその尊像の三昧耶薩埵を作り上げる。プラティシュターの対象が尊像である場合は、そこに表現されている尊格の三昧耶薩埵でよいが、僧院や経典の場合、大日（Vairocana）や無量光（Amitābha）などの特定の尊格が観想されることが後述されている。空性から種子を経て三昧耶薩埵を観想するプロセスは、成就法（sādhana）における三昧耶薩埵の生起に同じである。

三昧耶薩埵としてあらためて生起したプラティシュターの対象に、阿闍梨は新しい赤い衣を掛け、花を付ける。尊像の場合はこれらの行為は実際に可能であるが、建造物の場合は観念的に行われたのであろう。ただし、その花をこの後に阿闍梨はマンダラに置かなければならないので、衣や花は実際に準備されたはずである。最後に施主がプラティシュターの対象をともなって「アビシェーカの時の弟子のように」マンダラに入壇する。アビシェーカにおける弟子の位置をプラティシュターの対象と施主が占めることになる。

続いて阿闍梨が施主の持つ花をマンダラの中尊の上に置く。

一方、阿闍梨も [プラティシュターの対象である] 尊像などのすぐれた尊格のシン

ボルか、あるいはその〔尊格の〕部族の上首 (kuleśa) のシンボルに花を置け。あるいは、〔これらのシンボルに〕花を落とさない場合、尊像等にマンダラを示すだけで〔マンダラへの〕入壇とする。

プラティシュターのために準備されるマンダラは、尊像として表現された尊格か、その尊格が所属する部族の上首を中尊とするマンダラであることが後述されている。これらのマンダラでは、尊格はすべてシンボル (cihna) で表現されているため、その上に花を置くことになる。建造物や経典の場合も、三昧耶薩埵として観想された大日や無量光を中尊とするマンダラが用いられる。阿闍梨がマンダラの中尊に花を置くという行為は、弟子のアビシェーカにおけるいわゆる「投華得仏」に相当することが容易にみてとれる。アビシェーカの場合は目隠しをした弟子が手に持った花をマンダラに投じ、その位置から自分の本尊が決定されるのであるが、ここでは阿闍梨自身がマンダラの中央に花を置く。なおプラティシュターの対象に赤い衣を付け、花輪を与えることも、アビシェーカにおいてまずはじめに弟子が赤い衣に着替え、花輪を手にする⁹⁾ことに符合する。

沐浴のマンダラの準備

プラティシュターの対象にマンダラを示した後、沐浴などが行われるが、そのために準備される特別な場について、アバヤーカラグプタは次のように説明する。

つぎにマンダラの家屋の外で、東の方角に、あるいはここに場所がなければ北東のごく近いところで、心地よいところに、四角い沐浴の壇 (snānavedi) を作る。〔これは〕一辺4ハスタ、高さ2ハスタのもの、あるいは一辺8ハスタでその半分の高さのもの、あるいは一辺12ハスタ¹⁰⁾でその半分の高さをそなえる。〔不純物を含むなどの〕欠点などの問題のない土から作るか、れんがなどで作るか、それがなければ適宜、入手したものか、適当なところにあった土でもよい。水でといた穀物の粉などで描いた壇の四方と四維に八つの瓶 (kalaśa) をおく。なめらかでこちよく、甘露をふくんだパンチャガヴヤ (pañcagavya) が塗られ、天蓋、白香、幢、満瓶、花、舞、歌、音楽などで、あるいは手に入ったものでよいので、快適にする。日、曜、星宿、時間などの吉祥な時機¹¹⁾に沐浴をしながら、首飾り、足環、臂釧、耳飾り、腕釧、指輪などの装飾品か、あるいは手に入った装飾品で飾り、金剛薩埵の姿をし、明妃をともなった阿闍梨は、この場の中央に、門が西の方角にある一重の四角い線で囲まれた二重蓮華を、顔料か、水でといた穀物の粉などで描け。あるいはトーラナがなく、門が西の方角にある四角の中央に置かれた〔蓮華〕か、あるいは中心のマンダラ¹²⁾ (garbhamaṇḍala) の半分の大きさで、四角で四門、第二重にはトーラナ

がなく、東以下の帯には法輪、宝、蓮華、剣、さらに、四維には四母のシンボル、中央には八葉の二重蓮華を描け。以上が、簡略、中庸、複雑という区分による三種の沐浴のマンダラである。

沐浴のための場は「沐浴の壇」と呼ばれ、ここに正方形のマンダラ、すなわち「沐浴のマンダラ」が描かれる。これは金剛薩埵の姿をした阿闍梨が行う。沐浴の壇の大きさは三種類ある。正方形の一辺が4、8、12ハスタで、高さはいずれもその半分である。1ハスタは40cmから50cmに相当するため、一辺は小さいもので2m前後、大きいものでは6mにもなることになる。¹³⁾ プラティシュターの対象の規模に応じて選択されたのであろう。沐浴の壇の四方と四維には瓶が置かれ、壇の表面にはパンチャガヴァ、すなわち牛糞、牛尿、牛乳、ヨーグルト、ギーが塗られる。天蓋以下に列挙されているものは、すでに述べられたマンダラへのプージャーの品々とほとんど同じである。さらにこの表面に顔料か穀物の粉で描かれる沐浴のマンダラは、単純な形態のものから複雑なものまで三種類があげられている。もっとも複雑なものの場合、二重の正方形で構成され、四方には四つの門が開き、二つの正方形にはさまれた部分には八つのシンボルが描かれる。すなわち四方は大日、宝生、無量光、不空成就のシンボル、また四維には四母（ローチャナー、マーマキー、パーンダラー、ターラー）のシンボルである仏眼、金剛杵、蓮華、睡蓮である。小さい方の正方形の中には二重蓮華が描かれるが、これはその他の二つのマンダラでも同様である。また四方すべてには門をもたない場合でも、西の方角には必ず門を作る。沐浴の壇はマンダラの家屋の東、あるいは、そのやや北東よりに作られるため、沐浴のマンダラが門を開く西の方角には、すでに投華を終えたマンダラが位置している。

こうしてできあがった沐浴のマンダラの中央にプラティシュターの対象を安置する。直接ではなく、八葉蓮華を表面に描いた椅子か、月輪を描いた獅子座に置いたようである。プラティシュターの対象はマンダラの上に東向きに置かれる。これはマンダラに中尊が描かれる場合と同じである。阿闍梨はさらにその東に立って儀礼を行うため、阿闍梨、プラティシュターの対象を安置した沐浴のマンダラ、マンダラの家屋の三者が東から西に一直線上に並ぶことになる。

尊像や典籍など規模の小さいものがプラティシュターの対象の場合は、沐浴のマンダラへの安置は容易であるが、建造物や巨大な尊像は移動が困難である。そのようなときは移動する必要がないことをアバヤーカラグプタは次のように述べる。¹⁴⁾

別のところへ移動することができない僧院、仏塔、精舎、尊像などは、先述のように¹⁵⁾ 三昧耶薩埵のおすがたを観想し、[すでに制作した] マンダラを示したと確信せよ。

この場合、沐浴の場は必要ではない。

三昧耶薩埵を觀想し、これにマンダラを示すことが重要であることがここからわかる。

ニーラージャナ

沐浴の場に安置した尊像などに、まずニーラージャナ (nirājana) と呼ばれる以下のような儀礼が行われる。

[移動の可否] いずれの場合も、夕方に尊像などを前にして、これに面してパードヤ (pādya: 洗足水)、アルガ (argha: 闍伽水)¹⁷⁾ などをはじめに供えるか、あるいはアルガなどは供えなくてもよいので、ニーラージャナを行え。このとき、「オーム、アーハ、ヴィグナールンタカよ、フーン」(om āh vighnāntaka hūm) という [アムリタ] クンダリン (Amṛtakuṇḍalin: 甘露軍荼梨) のマントラと、「フーム」字を七回唱えたケシ粒 (siddhārtha) を左右の手で握り、それぞれ左まわりに二度回し「オーム、すべての罪を滅ぼす金剛薩埵の金剛のために、すべての罪を滅ぼせ、スヴァーハー」¹⁸⁾ と唱えながら、ニーラージャナを行い、ケシ粒を南東の方角に投げよ。同様に右まわりに左手でも右手でも行え。水でも行え。同様に白樟腦 (dharavitaśarāva) でも。同様にダルバ草 (darbha) の先についた牛糞の固まりでも。同様に食物の固まり (bhaktajadi) でも。同様に清涼剤 (sitalika) でも行え。しかし、白樟腦からあとのものは南東には投げない。つぎに両手で尊像などに触れる。マンダラの主尊のマントラを唱えながら、尊像などに直接か、あるいは鏡にお姿をうつすか、いずれか適当な方法で、胸に香水を塗り、花輪を頭に結わえ申し上げ、御前にアルガを供え、灯明を回し、[アムリタ] クンダリンのマントラと「フーム」とを七回唱えたギーの入ったサッジャラ (sajjara)¹⁹⁾ の香を供えよ。以上がニーラージャナの手順である。

この儀礼は二つの部分に分かれる。前半ではケシ粒や水、樟腦などを両手にもち、尊像の前で回す。アムリタクンダリンのマントラや滅罪のマントラが唱えられることから儀礼の障害を取り除くことが目的と考えられるが、白樟腦、食物の固まり、清涼剤など具体的にどのような素材であるのか不明なものも多い。後半では尊像に手を触れるが、前半のプロセスはこのための手の浄化の意味も含まれているのかもしれない。そして尊像に香水を塗り、花を付け、アルガ、灯明、香を供える。「鏡にお姿をうつして」というのは、典籍や絵画など、直接香水などをふりかけると損傷するものの場合の規定で、類似の表現はこの後、何度も現れる。

沐浴

ニーラージャナに続いて五種類の甘露などを尊像に塗る。

そのつぎに [アムリタ] クンダリンのマントラを唱えたダルバ草の束を用いて、銅器に入ったヨーグルト、牛乳、ギー、蜂蜜、砂糖の五種の甘露を、それから牛乳、ヨーグルト、ギー、牛糞、牛尿のパンチャガヴァヤとを、「オーム、フーム、トラーム、フリーヒ、アハ」(om hūm trāṃ hriḥ aḥ) というマントラを唱えながら、沐浴していただく尊像に塗れ。画布、典籍、尊像、画像などは、鏡にうつして [五甘露とパンチャガヴァヤを塗るのである]。

「オーム」以下のマントラは大日、阿閼、宝生、無量光、不空成就の五仏を象徴する種子である。五種の甘露とパンチャガヴァヤは牛乳、ヨーグルト、ギーが共通しているが、五種類の組み合わせが重要と見られ、両者の間の重複はいとわない。

尊像の沐浴は水の他にさまざまな香料でも行われる。

つぎに [アムリタ] クンダリンのマントラを唱えた清浄で芳香のする水で沐浴させ、真鍮の容器にいれたニヤグローダ (nyagrodha)、ウドウンバラ (udumbara)、プラクシャ (plakṣa)、ピッパラ (pippala)、ガンダムンダ (gandamuṇḍa) の五種の乳木の樹皮の液で香りをつけ、²⁰⁾「オーム、すべての如来よ、御身体の清きものよ、スヴァーハー」²¹⁾というマントラか、「オーム、フーム、トラーム、フリーヒ、カム、カハ」(om āḥ trāṃ hriḥ kham khah) というマントラを唱えながら、真鍮の容器に入った芳香のゴマ油 (taila) を塗って香りをつけ、真鍮の容器に入ったアマラクシ²²⁾を塗り、同様に沐浴させ、真鍮の容器に入ったターメリック (haridrā) を塗り、沐浴させ、梅檀 (śrikhaṇḍa)、赤梅檀 (raktacandana)、サフラン (kuṅkuma)、グランティカ (granthika)、アロエ (aguru) か、あるいは、サフラン、アロエ、ムスク (kasturi)、樟脳 (karpūra) などで、入手できたものでよいのでこれらで香をつけるか、胸の種子の光によってひきよせた如来と女尊が瓶で沐浴をさせ、吉祥の歌やさまざまな歌舞をはじめに演じ、「勝利の瓶」(vijayakalaśa) などの水をほら貝か、あるいは別のところにそそいだもので、「生じた者のみによって」というところからあとの、後述する言葉²³⁾を唱えて沐浴申し上げる。付着した水をやわらかい布でぬぐい、[施主の] 能力に応じた衣裳などでお飾り申し上げる。

ニヤグローダ以下の五種類の木は、いずれもイチジク科の植物で樹皮に白い樹液が含ま

れる。五種の甘露やパンチャガヴァは銅器に入っていたが、ここで沐浴で用いられる香料は、真鍮の容器に入れられている。またダルバ草は使用しない。引用文の後半は、如来や女尊らによる観想上の沐浴を含むが、後に狭義のプラティシュターの中で行われる水のアビシューカと同一の内容をもつ。胸の種子によってひきよせられた女尊たちが歌う「吉祥の歌」も、「生じたもののみによって」で始まる偈頌もそこで全文が紹介されている。この部分は本来、外的な所作であった沐浴に、やはり同じ沐浴の内容をもつ水のアビシューカの観想部分を重ね合わせることによって、儀礼の精神化がはかられたと考えられる。なお、沐浴の水が入れている「勝利の瓶」とは、「瓶の招請の儀軌」で準備された瓶である。この儀軌の中ではマンダラの尊格を象徴する複数の瓶が準備されるが、²⁴⁾「勝利の瓶」はマンダラの中尊に対応し、瓶の中でもっとも重要なものである。

招請と親近の祈願

阿闍梨は、仏や菩薩をともなった智薩埵を自分の胸の種子マントラから発する光によってひきよせる。この智薩埵はすでにプラティシュターの対象に観想された三昧耶薩埵に対応している。彼らにパードヤ、アーチャマナ、アルガの三種の水を供え、プージャーを行った上で、右膝を地面に付け、左手では鈴をならし、右手で香を供えながら、阿闍梨は次のような祈願の偈頌を智薩埵に対して唱える。

世尊よ、何某 (amuka) よ、すぐれた金剛をもつものよ、智恵の王よ、汝に礼拝します。弟子たちへのあわれみのためと汝らへのプージャーのために、また衆生の福德が増大するように、[衆生が] 菩提心を起こすために、主よ、慈悲の本質をそなえる方よ、汝によってプラティシュターがなされますよう祈願します。現世において、世尊よ、帰依する私に恩寵をお与えになりますように。諸仏、輪廻の世界に利益を与えるものよ、果に住する菩薩よ、あるいは、マントラの諸尊よ、神よ、護世神よ、菩提を示されたものよ、鬼霊よ、教えを喜ぶものたちよ、衆生よ、それ以外にも金剛の目を有するものたちよ、私にご配慮下さいますように。偉大な金剛杵を手にした私、何某は、何某のプラティシュターを行います。それによって汝らが[プラティシュターの対象に] お近づきになりますように。

「何某」という言葉が三度現れるが、はじめのところにはひきよせた智薩埵の名称を、第二、第三のところには阿闍梨とプラティシュターの対象の名をそれぞれ挿入して唱える。アバヤーカラグプタによれば、「恩寵をお与えになりますように」というところまでの前半部分で智薩埵を招請し、残りの部分でプラティシュターの対象に近づいてくださることを祈願する。²⁵⁾

祈願の偈頌を唱え終えた阿闍梨は、虚空にいる仏、菩薩に対してプージャーと礼拝をした後、「オーム、金剛よ、再び来臨されんことを、ムッフ²⁶⁾」というマントラを唱えてお帰りいただく。そして沐浴した尊像の体に再び香料を塗り、プージャーを行ってから、アムリタクンダリンのマントラを唱えながら、右手に持った金剛杵で三度触れる。最後に施食儀礼であるバリを行う²⁷⁾。一般に儀礼の最後に行う「尊格のご帰還」とバリが行われることから、儀礼の区切りがここにあることがわかる。

「尊格の招請の儀軌」の最後に、アバヤーカラグプタは若干の補足的な規定を行っている。それによれば、この「尊格の招請」のプロセスは、省略することも可能で、その場合、「世尊よ、何某よ」で始まる偈頌を唱えるだけで、次に説明する狭義のプラティシュターに移る。さらに、尊格の招請は施主にそれを行う能力、おそらく経済的な余裕がある場合に、施主が福德を積むために行うのであると述べる。尊格の招請と狭義のプラティシュターが本来はそれぞれ独立した儀礼で、プラティシュターの儀礼全体では前者が準備段階に位置づけられていることが、ここからも知られる。

(2) 尊像などのプラティシュター

三昧耶薩埵と智薩埵の合一

第17儀軌「尊像などのプラティシュター」のはじめの部分は、前の儀軌の内容と重複している。すなわち、三昧耶薩埵の生起から祈願の偈頌を唱えることまでをもう一度簡単に説明する。そして最後に三昧耶薩埵と智薩埵の合一を説く。

三昧耶薩埵の生起について、まず一般的な説明を次のように行う。

早朝、こころよい沐浴の壇をこのように作らせ、吉祥な日などに、適宜、装身具によって飾られた阿闍梨は、明妃をとまなう持金剛（Vajradhara）の姿をして座り、バリとプージャーをはじめに行って、安置した尊像や建立された僧院などを三昧耶薩埵のおすがたをもつものとしてふたたび生起させよ。この場合、タントラ経典、現観書（abhisamaya）、成就書（sādhana）などに記された各尊格の固有の生起次第を知ったものは、いかなる尊格のいかなるイメージであっても、空性のあとに続けて順序どおりに、あるいは、²⁸⁾ [空性と] 同時であってもよいので、その [イメージ] のように三昧耶薩埵のおすがたをしたものとして観想せよ。

空性から三昧耶薩埵を生起させる方法は、すでに見た尊格の招請のはじめの部分と同じであるが、そのために「タントラ経典、現観書、成就書などに記された生起次第」に依拠せよと指示している点は興味深い。成就法をみつかった文献や、「現観」の名のつく文献が生起次第を実践するためにこのような場面で利用されていたことが知られる。²⁹⁾ 阿

闍梨は前の儀軌では金剛薩埵の姿をしていたが、ここでは持金剛となって座っている。ここでの金剛薩埵は菩薩ではなく、本初仏としての金剛薩埵で、その位は持金剛にきわめて近い。

アバヤーカラグプタは僧院などの建造物や典籍のプラティシュターを行う場合の三昧耶薩埵の生起の方法についてさらに詳しく述べている。

典籍については、文字の集まりと空性を転じて、赤蓮華と日輪の上に、赤いフリーヒ字から生じた蓮華と、フリーヒ字から変化して、パーンダラーに抱擁された無量光、これを変化させ、集合した文字の形として、無量光のおすがたが浮かび上がった三昧耶薩埵が立っていると観想せよ。灯ろう (dipaṅkara)、僧院などについては、空性のあとに、蓮華と月輪に乗った白いブルーム字から生じた八輻輪と、ブルーム字から生じ、ローチャナーによって抱擁された大日を変化させて、灯ろうの形か、僧院の形か、庵 (gandhakūṭi) の形か、仏塔の形を [観想するのである]。ただし僧院については明妃をともなった大日のおすがたが顕現した三昧耶薩埵が立っていると [観想せよ]。同じように庵や仏塔も観想せよ。このように三昧耶薩埵を生起させ、バードヤ、アルガなどをはじめに供え、前と同様に³⁰⁾沐浴申し上げよ。

いずれも同じパターンで観想される。すなわち三昧耶薩埵として観想される尊格は、典籍では無量光、建造物では大日となる。それぞれのシンボルである赤蓮華と白い八輻輪を空性から生み、尊格の姿をとって、典籍や建造物の中にその姿が顕現していると観想するのである。

前の儀軌の内容がさらに続く。

つぎにこの直前に述べた儀軌にしたがって、五甘露を塗るところから始め、サフランなどの塗布と沐浴を行い、付着した水をぬぐうところまでを行い³¹⁾、マンダラの家屋の中に入れ、マンダラの北東のすみか、あるいは別のところでもよいが、それほど遠くはないところに、マンダラの方を向けて尊像などを安置申し上げよ。僧院など動かすことができないものは、その場所に置くだけでよい。適宜、これらの胸の種子と目などと身体などを加持したことをはじめに観想し、自分の胸の種子の光線³²⁾でそれぞれの方法で智薩埵などをお導きするなど、直前に述べたことを実行し、「世尊よ」から「下さい」という [偈] を三度口に出し、状況に応じて胸の光によってか、あるいは尊格によって智薩埵をひきよせ、それぞれ対応する三昧耶薩埵に入れ、ひとつのものにし、自在にせよ。

尊格の招請で説かれた沐浴と智薩埵への招請をふまえた記述となっているが、両者の間にブラティシュターの対象の移動が行われる。沐浴のマンダラの上に置かれた尊像などは、その西に位置するマンダラの家屋の中に移される。建造物のような移動不可能なものはそのままである。マンダラの北東に安置された尊像などに智薩埵をひきよせ、すでに生起させた三昧耶薩埵の中に挿入し、一体とし、自在にする。この四つの行為は三昧耶薩埵と智薩埵を合一させる方法として、成就法の中でしばしば述べられている。ここでは言及されていないが、四摂菩薩のマントラである「ジャハ、フーム、バム、ホーホ」(jah hūm bam hoh) が順に唱えられることも多い。

ブラティシュターの対象の移動と智薩埵、三昧耶薩埵の合一については、先述の尊格の招請の中では言及されていなかった。先に儀礼の概要を示したときは、この二つの階梯は尊格の招請に便宜上加えたが、むしろ、尊格の招請と狭義のブラティシュターという、本来、独立した二つの儀礼をつなぐプロセスとして位置づけるべきであろう。

九種のアビシェーカ

九種のアビシェーカとは水、宝冠、金剛、鈴、名前、阿闍梨、秘密、般若智、第四の各アビシェーカである。阿闍梨はこれらのアビシェーカをブラティシュターの対象である尊像などに順に行う。

はじめの水のアビシェーカは、諸如来や女尊がブラティシュターの対象となる尊格に、菩提心を本質とする甘露を瓶からそそぐ。同時に阿闍梨自身も勝利の瓶などの水を尊像にふりそそぐ。水のアビシェーカの全文は以下の通りである。

つぎに、自分の胸の種子の光によって、十方にいらっしゃる如来と、ローチャナー以下の女尊を眼前の虚空におみちびきし、プージャーを行い、尊像などにアビシェーカをするために、

「世界を守るために金剛杵を持つものによって諸仏のアビシェーカが [なされた]。功德の源 [である金剛杵をもつもの] がお与えになったように、[アビシェーカを] 与えよ。」

という偈頌によって祈願せよ。これらの如来らも明妃と交接状態になり、大食欲によって溶け、[阿闍梨] 自身の大日の門から入り、金剛の道から現れたその [如来の] 溶けたものによって、口を通じて女尊の蓮華の入った尊像などにアビシェーカを行う。ふたたび腕、顔などをそなえたお姿として蓮華から出して、外の虚空をあまねく満たす。ローチャナーなどの明妃と一体となった [如来] たちが、傘蓋、幢幡、歌舞、楽器、花、サフランなどの [供養の] 雨をともなったつぼみのごとき手で、菩提心を本質とする甘露でみたした白い瓶をわずかにかたむけて握り、蓮華より外

にあらわれたこの尊像などに対してアビシェーカを行う。同時に色金剛女(Rūpavajri)などが、

「すべての生類の胸に住し、すべての自我からなり、すべてのすぐれた部族の上首で、あらゆる衆生の父であり、大楽をそなえるもののこの称赞の歌を、今日、最高のアビシェーカを行う者は汝のために歌え。」

という吉祥の歌か、後述の歌でもよいので、[色金剛女などが] 先導する吉祥の歌を、[阿闍梨] みずからも、これか、あるいはそれらを歌い、勝利の瓶などの水をほら貝の中に一箇所にまとめるか、あるいは、順序どおりにそれぞれ別々でもよいので、花のつぼみとともに金剛杵を手で握り、つぼみとともに金剛杵の先を使って垂らした、菩提心の甘露の姿をした [水] で

「生じたもののみによって、すべての如来が沐浴をなさるように、神聖な水によって、わたしは清浄な者を沐浴申し上げる。」

「オーム、アーハ、すべての如来のアビシェーカよ、三昧耶よ、吉祥なるものよ、フーム、スヴァーハー³³⁾」というマントラと、「オーム、金剛の水よ、アビシェーカを行え、フーム³⁴⁾」というマントラを唱えながら、最上の阿闍梨にしてマンダラの上首のすがたをとった世尊金剛薩埵がアビシェーカを命じ、「[如来たちが]アビシェーカを行う」と確信し、[阿闍梨自身が] アビシェーカを行え。これが水のアビシェーカである。

前半部は生理的なヨーガをともなった阿闍梨の観想の内容である。如来らを溶解しその溶液によって、女尊の蓮華の中にいる尊像にアビシェーカを行う。蓮華から如来らを元の形で出現させ、やはり蓮華から現れた尊格に対し、ふたたび如来たちによるアビシェーカが行われる。この時、色金剛女たちの供養菩薩が周囲で「吉祥の歌」を歌う。この吉祥の歌のかわりに歌ってもよいとされる「後述の歌」とは、弟子へのアビシェーカの一つ「水のアビシェーカ」(第24儀軌)に登場する偈頌を指す³⁵⁾。水のアビシェーカは阿闍梨の観想における如来らによるアビシェーカと、阿闍梨自身による現実のアビシェーカという二重構造をとっているが、如来らによるアビシェーカは、マンダラの中尊であり阿闍梨自身でもある金剛薩埵によって命じられたことになっている。

宝冠のアビシェーカでは五仏によって加持された宝冠を尊像の頭部に付ける。この時、特定のマントラ³⁶⁾を唱えるとともに「マンダラの主尊の姿をした持金剛である阿闍梨が付ける」と確信しながら行う。プラティシュターの対象となる尊像がヘールカ系の尊格の場合、かわりに布 (paṭa) を付ける。

金剛と鈴のアビシェーカでは、それぞれ金剛杵と金剛鈴を尊像に与える。金剛杵を与える時には「諸仏の金剛のアビシェーカによって、今日、汝にアビシェーカが与えられ

た。これはすべての仏の位である。成就のために金剛を握れ³⁷⁾という偈を、また金剛鈴の時には「オーム、金剛よ、上主よ、汝にアビシェーカを行おう。立て、金剛杵よ、汝は誓願である³⁸⁾」というマントラをそれぞれ唱える。いずれも金剛薩埵が唱えているという確信とともに行う。

名前のアビシェーカもやはり金剛薩埵による命名式である。「オーム、金剛薩埵よ、汝に金剛の名前のアビシェーカによってアビシェーカを行う。オーム、汝は何某金剛である³⁹⁾」というマントラによって命名する。「何某」のところに尊像の尊格にふさわしい名称を入れて唱えるのである。

阿閼梨のアビシェーカは次のように行われる。

尊像などの尊格が、金剛杵と金剛鈴を持った手で智恵の印（女性のパートナー）を抱擁するしぐさをしていると観想し、直前に述べた水のアビシェーカの儀軌によってアビシェーカを行い⁴⁰⁾、おのおのの部族の主尊を頭に印としてつける。部族を知らない場合、阿閼梨金剛薩埵の印をつける。他の如来、菩薩、女尊は、そこ（頭？）に智薩埵のおすがたで挿入し、「オーム、よく建立された金剛女よ、スヴァーハー⁴¹⁾」というマントラで加持する。僧院や仏塔には「オーム、フーム、フリーヒ、ブルーム、カム、金剛になれ、堅固に建て、ブルーム、カム⁴²⁾」という【マントラ】によって、典籍に関しては「オーム、よく建立された金剛女よ、スヴァーハー」と「オーム、フーム、フリーヒ、トヴァム」というふたつのマントラで【加持するのである】。

水のアビシェーカをもう一度繰り返すことによって、尊像の額に部族主の姿が印(mudrā)として浮かび上がる。尊格が所属する部族が不明の時に金剛薩埵か阿閼梨の印が生じるのは、やはり、部族が不明の時に制作するマンダラがこの二尊のいずれかのマンダラであったことに対応している。僧院や典籍など、尊像以外のものがプラティシューターの対象になるときは、それぞれ定められたマントラが唱えられる。

秘密、般若智、第四の各アビシェーカは観想上のアビシェーカである。

つぎにマンダラの主尊のお姿をとった金剛薩埵が、自分の胸の種子の光によって大日と如来の集まりを、明妃をともなつたまま引き寄せ、大日の門より挿入し、溶かし、大楽と融合し、金剛杵と蓮華の両者によって解放された菩提心の姿をしたものを、尊像などの尊格の口に入れると観想せよ。これが秘密の灌頂である。

つぎに、この金剛薩埵にかしづく女尊と完全に結合した尊像などの尊格が、サハジャ(sahaja)の楽の自性を持つと念じよ。これが般若智の灌頂である。

このつぎに、この持金剛が説明した第四灌頂の自性を持つ尊像などの尊格が、捨

て去るべき習気をともなった障礙の大楽からできた、空性と慈悲とがひとつのものであると念じよ。これが第四灌頂である。

秘密のアビシェーカでは金剛薩埵、すなわち阿闍梨が、生理的なヨーガによって作り出した菩提心を尊像の口の中に入れる。般若智のアビシェーカにおいて金剛薩埵の明妃とプラティシュターの対象の尊格が性的な結合を行い、尊格がサハジャの楽を獲得する。第四のアビシェーカでは尊格自身が空性と慈悲とが不二であることを悟る。

プージャー

アビシェーカを終えた尊格に対して、阿闍梨は衣、花、香、灯明、食物、塗香、装身具を供える。この時に唱えられるマントラは「オーム、アーハ、金剛衣女よ、フーム、スヴァーハー⁴³⁾」というように、供物名に金剛を冠した女性形が用いられる。ただし最後の装身具では「オーム、アーハ、すべての装身具よ、フーム、スヴァーハー⁴⁴⁾」にかわる。続いて供物に水をふりかけて浄めるマントラ「オーム、アーハ、すべてを清めるものよ、フーム、パット⁴⁵⁾」と、果実を供えるマントラ「オーム、ジャム、スヴァーハー⁴⁶⁾」が紹介される。さらに誓願のための財産、牛黄も供えて「オーム、金剛薩埵よ、アーハ⁴⁷⁾」というマントラとともに尊像に対して鏡を示す。

開眼作法

尊像の眼を開ける開眼作法についての説明は次のとおりである。

これ（プージャーを指す）の直後か、あるいはホーマを行うならばホーマで満足させたあと、尊像などに応じて、また施主の意図に応じて、息災から仏性 [の獲得] まで、施主たちの利益を希求しながら、一マーシャカ⁴⁸⁾を超えない重さの金の匙で、銀の碗にいれたバターと蜜を [尊像の目に] 塗り、「オーム、目よ、目よ、平等な目よ、清めるものよ、スヴァーハー⁴⁹⁾」と唱えつつ、眼薬を塗りながら尊像の目を開けよ。典籍などの尊格の場合、鏡にお姿をうつして行う。息災などが目的の場合、施主などがもつばら観想する特別な尊格を念じよ。

尊像などの制作を依頼し、寄進した施主の願望を阿闍梨が祈念しながら開眼作法を行ったことがわかる。プラティシュターの対象に眼薬を直接塗ることができない場合の方法は、前と同じである。

乳粥の摂取

乳粥 (pāyaśa) とは牛乳、砂糖、米などで作った料理である。釈尊が苦行の後に村の娘から受けて滋養を取った食物も同じ乳粥である。⁵⁰⁾開眼作法の前にホーマを行った場合、その火炉の上で乳粥を作る。

これに続いて炉の火の上の三脚 (yantrika) においた容器の中で大杓と小杓か、あるいはこれがないときは、ピッパル樹の葉を用いて、自分の主尊のマントラをおごそかに唱えつつ、牛乳、砂糖、米、バター、蜜、荒砂糖 (śarkara) から乳粥を作れ。ホーマの炉がなければ別の火の上でその乳粥を [作れ]。乳粥に対し、「オーム、神聖なる食物よ、三昧と禪定に喜ぶ者よ、スヴァーハー⁵¹⁾」というマントラを唱え、唱えながら尊像に、典籍などの場合は [鏡に] うつした尊格にお召し上がりいただく。アーチャマナ (ācamana) や梅檀なども、またキンマ (tambūla) も供えよ。そして「オーム、フーム、トラーム、フリーヒ、アハ」という誓願をお聞かせ申し上げよ。

このあと、プラティシュターの対象が典籍や建造物の場合、対応する尊格を対象の中にもどす手法が追加される。

つぎに典籍に関しては、明妃をともなった無量光を文字の中に挿入し、文字の形をとったものを、一方、[僧院や仏塔については] 明妃をともなった大日を、僧院か、あるいは仏塔に挿入し、すべての等正覚、その法、菩薩、声聞などのよりどころである僧院の形をとったものを、また、さまざまな三昧の基礎である仏塔の形をとったものを、[それぞれ] 生類の利益のために金剛薩埵などが輪廻のあいだは加持していると思念せよ。

尊像の場合とは異なり、開眼作法や乳粥の施与を直接行うことができないため、プラティシュターの対象と無量光や大日などの尊格をいったん切り離して、これらの作法を行ったのであろう。

請願と帰依

阿闍梨はプラティシュターの対象である尊格に対し、対象の中に長くとどまることを祈願するために次の偈を唱える。

すべての等正覚が、兜卒天にとどまっていたように、マヤー女尊の胎内に「釈尊がとどまっていた」ように、ここにとどまり下さい。何某のために菩提心を増大せしめるように、主はこの尊像 (ākṛti) につねにおとどまりになり、この供養⁵²⁾をお受けください。⁵³⁾

この後、アムリタクンダリンのマントラを唱えながら尊像の下、中央、上の三つの部分で、右手にもった金剛杵を回し、尊像を堅固にしたと観想する。さらに阿閼以下の五仏に対する称赞の偈を唱える。

阿閼金剛、偉大な知者よ、金剛界よ、偉大な賢者よ、三つのマンドラ、三つの最高の金剛、金剛音よ、汝に帰依したてまつる。

大日よ、偉大な清浄なるものよ、金剛の寂靜よ、偉大な歓喜よ、自性は光明、最高の中でも最高なものよ、金剛の教示者よ、汝に帰依したてまつる。

宝の王よ、深遠なるものよ、金剛の虚空よ、虚空よ、無垢なる者よ、自性は清浄で、まといつくもののない者よ、金剛の身体をもつ者よ、汝に帰依したてまつる。

金剛の無量光よ、大王よ、無想なる者よ、虚空よ、金剛杵をもつものよ、執着、波羅蜜に到達したものよ、金剛の語よ、汝に帰依したてまつる。

不空金剛⁵⁴⁾よ、等正覚よ、すべての望みを成就された方よ、清浄なる心髄から生じるものよ、金剛薩埵よ、汝に帰依したてまつる。

この偈の初出は『秘密集会タントラ』(Guhyasamājantra) 第17章 (Matsunaga 1978: 96) である。

お許しとご帰還

プラティシュターの儀礼の終結部は次のとおりである。阿閼梨は儀礼の不備をわびて、罪が残らないように「オーム、金剛薩埵よ、誓願を護持せよ」で始まる百字からなるマントラ (śatākṣaramantra: 百字真言) を三度唱えて、さらに次のような言葉を発する。

手に入らない、知らない、能力がない、いたらない、その他の [過失] もすべて、慈悲を本質とされる方よ、お許し下さい

さらにプラティシュターの尊格が来臨するときに同伴した諸尊に対し、次の偈で帰還をうながす。

等正覚、女尊、その子息（菩薩）ら、梵天をはじめとする [神]、神、ナーガの儀軌にいたらない点があることなどをお許し下さい。火、地、水、風からながらく尊像をお守り下さい。施主とその息子など、弟子たち、そして私自身にも息災と増益と吉祥をすべてお与え下さい。仏国土へお帰りください。そしてふたたびここにおいで下さいますように。⁵⁵⁾

最後にバリを行い、施主自身もプラティシユターの対象に右遷、プージャー、礼拝を行い、阿闍梨には布施を行う。

補足規定

プラティシユターの儀礼の全容は以上であるが、VA の著者はさらにいくつかの補足的な説明を行っている。

まずプラティシユターの対象に招請する尊格についての規定である。これについてはすでに述べたとおり、尊像の場合はその尊格自身か、所属する部族の上首、典籍の場合は無量光、建造物の場合は大日である。もし部族が不明であれば阿闍か金剛薩埵が代用される。これはあらかじめ制作されるマンダラでも同じである。

プラティシユターの尊格に関する規定は、この少し後でも次のように行っている。

一方、他のサンヴァラ (Samvara) やヘーヴァジュラ (Hevajra) などの尊像の場合にも、[秘密] 集会の三昧耶薩埵を生起し、智恵のマンダラを入れ、アビシエーカを行うことによってプラティシユターがなされるであろう。これは [秘密] 集会が最高であるからである。これにつづいて [秘密] 集会の三昧耶と智恵のマンダラの自在者 (主尊) が、サンヴァラなどのお姿をもつと明瞭に観想すべきである。その尊像がそのお姿をもつということになぜ問題があるかと [世尊は] お説きになっている。

尊像のプラティシユター一般で使用可能な阿闍や金剛薩埵のマンダラとは、『秘密集会タントラ』にもとづくマンダラである。アバヤーカラグプタはこのマンダラを念頭に置いてこれまでのプラティシユターの説明を行ってきた。そして、サンヴァラやヘーヴァジュラなどの母タントラ系の尊格に対しても、同じ秘密集会のマンダラを作り、その中尊を尊格として招請するよう指示している。

つづいてアバヤーカラグプタは「簡略なプラティシユター」と呼ばれるプラティシユターの方法を紹介する。

簡略なプラティシュターの場合、尊像などが空性 [であることを観想し]、それに続いてすみやかに、目や身体などを加持したそれぞれの尊格の三昧耶薩埵を生み出し、自分自身の胸の種子の光によってひきよせられたそれぞれの尊格の智薩埵をそこに入れ、自分の胸の種子の光によってひきよせた如来たちとともにみずから瓶の水によって灌頂し、供養し、その尊格のマントラを百八回唱える。これで尊像などのプラティシュターが行われたことになる。

通常のプラティシュターの中から、三昧耶薩埵の生起 (A-1の一部)、智薩埵との合一 (A-7)、水のアビシュカ (B-1の一部)、プージャー (B-2) を行い、その尊格のマントラを百八回唱えて終わる。

補足規定の第三は、如来の遺骨 (舎利) を納める尊像や仏塔のプラティシュターを行う方法である。一般のプラティシュターを行う前に次のような手続きが必要とされる。

如来のご遺体に対し特別の崇敬を行いたいという場合、制作時に尊像の頭か背中、仏塔の場合、中央に空間を作れ。これができたら貝葉とサフランと牛黄 (gorocanā) とで「世尊に帰依してたてまつる。釈迦牟尼に、如来に、等正覚者に、オーム、牟尼よ、牟尼よ、偉大な牟尼よ、スヴァーハー、存在物の因と源があるとき、その因を實に如来は語った。またそれらの止滅を、同様に説示者である偉大な沙門は [語った]。」⁵⁶⁾という特別な陀羅尼を書き、洗い清めた遺骨をこれで包み、「オーム、マントラの身体の胎内に、スヴァーハー」⁵⁷⁾と唱えながら穴におさめよ。そして「オーム、金剛の身体の胎内に、スヴァーハー」⁵⁸⁾と唱えながら、金剛の塗料で穴の入り口をふさぎ、前と同じようにその [尊像などの] プラティシュターを行え。

特別な陀羅尼を貝葉に書き、それで遺骨を包んで、尊像などの内部に作った穴に納めたようである。⁵⁹⁾

プラティシュターの方法の例外規定として、アバヤーカラグプタは女尊の尊像のプラティシュターについても説明を補っている。それによれば儀式全体はすでに紹介した簡略なプラティシュターにほぼ一致しているが、尊像の招請する尊格が女尊そのものではなく、その配偶者である男尊であることが異なる。また最後に唱えられる尊格のマントラも女尊ではなく男尊のマントラが用いられる。

最後にアバヤーカラグプタは念珠のプラティシュターの方法を紹介する

持金剛のお姿をした阿闍梨に対し、自分の右手の五本の指が五鉈金剛杵の本質をもつとすみやかに観想し、「アッハ」 (ah) 字より生じた日輪を「アッハ」字によつ

113 インド密教におけるバリ儀礼 (森)

て加持し、左手の指が蓮華の花弁の形をしているとすみやかに観想し、「ア」(a) 字から生じた月をこれ (ア字) によって加持したと観想し、両手の間に保持した数珠の中央の糸が金剛薩埵の自性を持ち、四方と四維の八本の糸が蓮華手、弥勒、虚空庫、普賢、金剛手、文殊、一切除蓋障、地蔵の自性をもつと、また玉 (gulir) が大日などの自性をもつと、また上端の玉 (uparigudi) は力や無畏などの法の集まり⁶⁰⁾である仏塔を自性とするすみやかに観想し、胸の種子の光によって引き寄せた金剛薩埵以下の尊格をそれぞれ挿入し、「(前半部意味不明) オーム、パデー、パデー、偉大な知恵をもったすべての仏を私は生む。フーム、フーム、フーム、ホー、ホー、アッハ、カム、スヴァーハー」⁶¹⁾というマントラで加持せよ。瓶の水でアビシェーカをしながらプージャーを行え。

これまでのプラティシュターとは異なり、招請されるのは単独の尊格ではなく、金剛薩埵を中心に八大菩薩を配した一種のマンドラと、さらに大日と仏塔があげられている。アビシェーカの部分は水のアビシェーカの部分を指すようである。

念珠のプラティシュターには簡略版もある。

簡略な方法の場合、数珠に対し語金剛 (Vagvajra) を観想し、智薩 と一体にし、そのお姿を変化させて数珠の形を観想し、瓶の水でアビシェーカを行い、プージャーをして、語金剛の心 [マントラ] を108回唱えよ。これが数珠のプラティシュターである。

複数の尊格から語金剛一尊に変わるが、基本的な枠組みは尊像などの簡略なプラティシュターと同じである。

(3)池などのプラティシュター・庭園などのプラティシュター

池などのプラティシュター

アバヤーカラグプタは尊像のプラティシュターを中心とした建造物、経典、念珠などのプラティシュターを前の儀軌でまとめて説明し、貯水池などのプラティシュターと次節の庭園のプラティシュターを独立させて説いている。これは、水を蓄えるための施設⁶²⁾と庭園のプラティシュターが、それ以外の施設とはかなり異なった方法で行われるためである。

貯水池などのプラティシュターは、大きく四つの段落に分けることができる。まずはじめの部分を示そう。

施主に能力がある場合、水辺に大日を主尊とするマンダラを描き、そのかたわらでマンダラの中尊とのヨーガを實踐し、バリを池などの方角に向かって投げ、水が空 (śūnya) になったと観想する。「ブルーム」(bhrūm) 字から生じたマンダラと「ブルーム」字から生じローチャナーと交接状態にある大日とを変化させて、以下のような白いヴァルナ (Varuna) の三昧耶薩埵を観想せよ。人間の容貌をそなえ、上に七つの蛇蓋があり、左手にはナーガでできた羂索をもつ。抱擁した配偶神と交接し、右手ではほころしげに青いウトパラをかかげる。へそから下は蛇の形をしている。自分自身の胸の種子の光によってそこにひきよせた大日に、バードヤ、アーチャマナ、アルガをまずはじめに供え、「オーム、金剛よ、汝は請願である」⁶³⁾と唱えて、この[ヴァルナの三昧耶薩埵に]挿入し、アビシェーカを行い、花などでプージャーをする。これを変化させ、すがたをもち、智慧の甘露を本質とし、芳香、美味、軽さ、純粹、穏やかさ、冷たさ、のどや腹を痛めない[穏やかさ]ということから、これら八つの要素を水底までそなえた水が、八種のナーガの部族の棲家をもち、周囲が波の帯で囲まれていると観想せよ。⁶⁴⁾

前節のプラティシュターとの共通点、相違点に注意してまとめてみると、あらかじめ制作されるマンダラは大日の中尊とするマンダラで、阿闍梨自身も大日と一体となって儀礼を行う。しかし、三昧耶薩埵として招請されるのは大日そのものではなく、大日が姿を変えたヴァルナである。ヴァルナは次の段落では金剛ヴァルナとも呼ばれている。⁶⁵⁾三昧耶薩埵を生起させ、これに大日の智薩埵を挿入して一体とする。アルガなどの水を供えてから、アビシェーカを行い、プージャーがこれにつづくのは前と同様である。ふたたび、ヴァルナを水の中へ帰す点も、僧院や典籍のプラティシュターで、乳粥の摂取の後で行った観想のプロセスに対応しているが、さらにここでは、水の八つのすぐれた特徴を観察し、水の中に八種のナーガの棲家がそなわっていることを確信する。

第二の部分ではヴァルナを中心とし、八匹のナーガの鑄造の像をまわりに配した一種の立体マンダラを貯水池などの中心に作る。⁶⁶⁾

またここで、三昧耶薩埵の本質をもち、胸の種子の光によって引き寄せられた智薩埵と不可分となった鑄造の八匹のナーガを水底に置け。[池の]深さの二倍、もしくはは等しい高さで、同じように二種の薩埵の本質をそなえ、先がヴァルナの姿をし、池の中央にたてた杭の近くに[置く]のである。杭がない場合、池の中央に置く。このうち、東には金で作ったアナタ (Ananta) を、南には真鍮で作ったパドマ (Padma) を、西には銅の自性のタクシャカ (Takṣaka) を、北には純銀で作ったヴァースキ (Vāsukhi) を、北東には白鉛から鑄造したマハーパドマ (Mahāpadma) を、南東

111 インド密教におけるバリ儀礼（森）

には鉛の自性のシャンカパーラ (Śaṅkapāla) を、南西には青銅で作ったカルコータカ (Karkoṭaka) を、北西には鉄で作ったクリカ (Kulika) を置くのである。杭がなければ、水晶で作った金剛ヴァルナを中央におく。

このヴァルナとナーガたちに五甘露と牛乳などを与え、プージャーとホーマを実践した後、同じマンダラを水辺でも観想する。さらに周囲には一面にあらゆるナーガを観想する。これが第三の部分である。

儀礼の最後にナーガへのバリが行われる。

「オーム、アーハ、金剛ヴァルナよ、フーム、スヴァーハー」⁶⁷⁾「オーム、アーハ、アナンタよ、フーム、スヴァーハー」⁶⁸⁾このように各名称を入れたマントラを唱えながら、白い花でプージャーを行い、左手で鎌首の形 (phaṇābhinaya) をつくり⁶⁹⁾、右手を覆い、

「オーム、アナンタよ、ヴァースキよ、タクシャカよ、カルコータカよ、パドマよ、マハーパドマよ、シャンカパーラよ、クリカよ、パーラよ、デーヴァティよ、マハーデーヴァティよ、ソーマシキよ、マハーシキよ、ダグダダラよ、マハーダグダダラよ、アバラーラフルンダよ、ナンダよ、ウパナンダよ、サーガラよ、マハーサーガラよ、タプタよ、マハータプタよ、シュリーカーンティよ、マハーカーンティよ、ラトナカーンティよ、スルーパよ、マハースルーパよ、バドラーヒカよ、マホーダラよ、シリよ、マハーシリよ、オーム、食べよ、来たれ、来たれ、偉大なナーガの主よ、すべてのものよ、プール、ブヴァハ、ブム、ブム、スヴァーハー」⁷⁰⁾

というナーガのためのバリのマントラを唱えつつ、牛乳のバリを加持せよ。

バリは通常のプラティシュターでも最後に行われたが、この場合、ナーガ・バリと呼ばれる特別なバリが行われる。

この後、ヴァルナをはじめとするナーガたちにこの場に長くとどまっていただくよう請願し、百字からなるマントラを唱えてお許しを請う。そして牛乳のバリを八方に供え、さらにその周囲にも撒いて儀礼を終わる。

庭園などのプラティシュター

庭園などのプラティシュターに関するアバヤーカラグプタの記述はそれほど長くはない。

マンゴー林と園林などのプラティシュターに関する儀軌について。四方へのバリを与え、大日を自分自身としたものは、中心の木が空性につづいて大日の姿をしていると観想し、大日の智薩チサクにアルガなどをはじめに供えてから、[中心の木に]智薩埵チサクヂを挿入し、瓶[の水]で灌頂を行う。それを変化させたその木と、そのとき、他の木々も変化したと念じ、これらの林の中心の木とその加持者である尊格たちに花などでプージャーを行う。さらに果実などで[プージャーを行い]、学生期を終えた者⁷¹⁾(upakurvāṇa)の園林などが、ながらくとどまって下さるようもっぱら請願し、四方へのバリを行え。

苑林の中に観想される尊格も大日で、この尊の三昧耶薩埵サマイヤサクヂと智薩埵チサクヂがまず合一する。これに瓶の水でアビシェーカを行い、これを変化させて庭園の木々になったと観想する、そして庭園の中心の木と、これを加持すると考えられる大日に対し、花などでプージャーを行う。最後にこの地にながらくとどまることを祈願し、バリを行う。庭園などのプラティシュターはすでに述べた簡略なプラティシュターと類似の枠組みで行われる。

3. 考 察

これまで概観してきたプラティシュターの儀式は複雑な構造をもった儀礼である。全体はニーラージャナと沐浴を中心とする尊格の招請と、アビシェーカ、プージャー、開眼作法などからなる狭義のプラティシュターから構成される。このうち前者が準備段階で、後者がプラティシュターの中心であろう。そして両者の間に三昧耶薩埵サマイヤサクヂと智薩埵チサクヂの合一がおかれている。ここでは、プラティシュターの儀礼を(1)プラティシュターの種類、(2)他の密教儀礼との比較、(3)儀礼の形成という三つの点から検討してみよう。

プラティシュターの種類

VAに説かれるプラティシュターは、その対象にしたがって方法が異なる。プラティシュターの対象となるのは尊像、建造物(僧院、仏塔、灯ろうなど)、典籍、念珠、貯水池、庭園である。このうち終わりの二つにはそれぞれ独立した儀軌がたてられて解説されている。それ以外の尊像から念珠までが「尊像など」と呼ばれ、一つにまとめられる。ただしその中でも念珠のプラティシュターは個別に説明されている。また建造物や典籍など、尊像と異なりプラティシュターの対象の尊格のイメージをそなえていないものは、アビシェーカやプージャーなどの儀礼の後に、尊格をプラティシュターの対象の中に帰入させるプロセスが加えられる。これは貯水池や庭園のプラティシュターにおいても同様である。さらに、如来の遺骨を納めた尊像や仏塔のプラティシュターへの言及もあった。その場合、特定の陀羅尼を記した貝葉に遺骨を包み、尊像などの内部に納め

てから、通常のパラティシュターを行う。

このようにパラティシュターの種類はその対象にしたがった方法で実践されたが、同一の対象であっても通常のパラティシュターの他に、簡略な方法のパラティシュターが存在した。尊格の三昧耶薩埵を生起させ、これに智薩埵を挿入し、如来たちとともにアビシェーカとプージャーを行う。そしてその尊格のマントラを108回唱える。これらはパラティシュターを行うための最少限必要とされるプロセスなのであろう。念珠のパラティシュターの場合、特別にこの仏具の簡略なパラティシュターが紹介され、そこでは招請される尊格も変更される。庭園などのパラティシュターは、尊像などに対する簡略なパラティシュターにほぼ一致する方法で行われていたらしい。

パラティシュターの対象による方法の相違は、貯水池などのパラティシュターにとくに顕著である。ヴァルナと八匹のナーガを観想し、これにアビシェーカとプージャーを行うのは、他のパラティシュターと同様であるが、これら九尊の立体マンダラを実際に作成し、池の中に安置するという方法は、他のパラティシュターには見られないものである。また通常のパラティシュターにおいて、最後に簡単に触れられているバリが、ナーガを対象とした特別なバリへと変更されている。

パラティシュターの方法は対象に応じて異なるが、同時に、招請すべき尊格もパラティシュターの対象によって規定される。尊像のパラティシュターを行う場合、尊像自身か、あるいは阿閼か金剛薩埵が招請される。僧院、仏塔、灯ろうなどの建造物には大日があげられるが、大日はこのほかにも庭園のパラティシュターにも登場し、また貯水池のパラティシュターで招請されるヴァルナも大日に同一視されていた。宗教的な建造物や施設のパラティシュターを行うときには、いずれも大日が招請されていることがわかる。⁷²⁾このほかにも無量光が典籍、金剛薩埵と八大菩薩が念珠のパラティシュターに登場する。ただし念珠の簡略なパラティシュターを行う場合は、招請される尊格は語金剛に変わる。

これらの尊格は、あらかじめ準備されるマンダラの中尊にほぼ一致している。尊像のパラティシュターのみは、その尊格が所属する部族の上首のマンダラが作られる。しかし、所属する部族が不明の時は、やはり阿閼か金剛薩埵のマンダラを準備せよと述べ、ここでも招請される尊格との一致が見られる。

ところで、VAには実際にパラティシュターやアビシェーカで用いられるマンダラを制作する方法が詳細に説かれている。そこで説明されているマンダラは、数え方によっても異なるが、少なくとも26種類のマンダラが含まれる。そして同じ26種のマンダラの観想法が、アバヤーカラグプタの別の著作『ニシュパナヨーガーヴァリー』(Nīṣpannāyogāvalī) に解説されている。弟子のアビシェーカの場合、制作されるマンダラは阿闍梨の流儀や弟子の資質によって26種の中からいずれかが選ばれたと考えられるが、パラティシュターの場合は、すべてのマンダラがその選択の対象になったわけではない。阿

阿閼か金剛薩埵が中尊のマンダラは第1、第2、第3、そして第25の四つを数えるが、大日が中尊のマンダラは第19の金剛界マンダラのみである。⁷³⁾ ヴァルナ（あるいは金剛ヴァルナ）のマンダラは26種のマンダラには含まれない。無量光が中尊のマンダラも見いだせないが、第一の文殊金剛マンダラの中尊を文殊金剛から無量光に入れ替えて、無量光のマンダラができることが『ニシュパナヨーガーヴァリー』の第1章に述べられている。⁷⁴⁾ また念珠のプラティシュターに登場する金剛薩埵と八大菩薩は、第2章で説かれる『秘密集会タントラ』の聖者流のマンダラにいずれも含まれる。⁷⁵⁾

26種のマンダラのはじめの三種のマンダラの中尊が、阿閼あるいは金剛薩埵であることは、尊像のプラティシュターの時に作られるマンダラの多くが、この二尊のいずれかであることと無関係ではないであろう。はじめの二つのマンダラは典籍や念珠のプラティシュターにおいても使用することができる。このうちはじめの第1、第2のマンダラは『秘密集会タントラ』のジュニャーナパーダ流と聖者流のマンダラで、第3のマンダラは、『秘密集会タントラ』の影響を強く受けた『サンプタタントラ』 *Sampūtantra* にもとづくものである。当時流布していた数多くのマンダラの中で、『秘密集会タントラ』のマンダラが特別な位置にあったことが予想される。このことは、プラティシュターの儀軌の中でアバヤーカラグプタが、ヘルカ系の尊格のプラティシュターを行う場合でも、その尊格自身ではなく、『秘密集会タントラ』の尊、すなわち阿閼か金剛薩埵を招請せよと指示し、これらの尊の優越性を強調していた点とも符合している。

他の密教儀礼との比較

プラティシュターの儀礼に含まれる階梯の多くは他の密教儀礼と共通するものが多い。特に弟子のイニシエーションであるアビシェーカとの類似性は注目される。プラティシュターもアビシェーカもマンダラを必要とする儀礼で、この二つの儀礼をマンダラの制作とあわせて説いた文献がVAであることはすでに述べた。プラティシュターが尊像や建造物などの「もの」を対象とし、アビシェーカが弟子に対して行われる儀礼であっても、いずれも「聖別式」としての性格をもつ。

VAのアビシェーカの儀礼は複雑な体系をもち、おそらく『時輪タントラ』 (*Kālacakratāntra*) 以降のインド密教のスタンダードなアビシェーカの様式を示していると考えられる。⁷⁶⁾ ここにはプラティシュターの儀式の中心となっている階梯との対応箇所が数多く見いだせる。沐浴の壇の準備とニーラージャナは第20儀軌「弟子の招請」 (*sisyādhivāsana*) の中にも説かれる。これはアビシェーカの準備段階に位置し、アビシェーカを受ける弟子が沐浴の壇において浄化される。アバヤーカラグプタはここでは儀礼の手順については詳述せず、プラティシュターの中の「尊格の招請で説いたように」行えと指示し、プラティシュターと同一の方法がとられたことが知られる。阿闍梨は浄化を

終えた弟子をマンダラの家屋に移動し、ここで弟子の中に尊格を降臨させる。これは智薩埵の招請と三昧耶薩埵との合一に対応する。この後、一連のアビシェーカがつづく。ひとつめのアビシェーカである「花輪のアビシェーカ」が、尊格の招請の儀軌の冒頭に置かれた投華に相当することは、すでに述べたとおりである。つづいて水、宝冠、金剛杵、鈴、名前、阿闍梨の各アビシェーカが行われる。このとき、阿闍梨が口にする偈頌やマントラの多くは、プラティシュターのときのものと同じである。秘密、般若智、第四の各アビシェーカも弟子のアビシェーカの中に含まれ、類似の観想法をとまっている。弟子のアビシェーカではさらに弟子の臉に「金の匙」で眼薬を塗り、鏡を示して開眼したことを悟らせる。開眼作法はプラティシュターでも重要なプロセスであったし、鏡の提示は、順序は異なるが、プージャーの最後に置かれていた。

VAの説くアビシェーカはこのほかにもさまざまなプロセスがある。たとえば阿闍梨のアビシェーカと秘密のアビシェーカの間にはマントラの授与などの儀軌が加わる。また阿闍梨のアビシェーカの前には三種の請願 (samaya) の授与、第四のアビシェーカの後には三種の誓誠 (vrata) などの儀軌がある。しかし、アビシェーカの儀式全体の大きな枠組みは、沐浴などで準備を終えた弟子に花輪以下の数種のアビシェーカを与えることによって、仏の位を獲得することである。この弟子のかわりに尊像や建造物などの「もの」を置けば、その構図はプラティシュターとまったく同じである。特にプラティシュターの中で行われた九種のアビシェーカは、おそらく弟子へのアビシェーカの中心を占める水のアビシェーカから第四のアビシェーカまでを下敷きにしていることは確かであろう。

プラティシュター、特に狭義のプラティシュターの中心となっているのはアビシェーカであるが、儀礼全体では三昧耶薩埵と智薩埵の役割が重要である。尊格の姿をかたどった尊像はともかく、仏塔や典籍のような「もの」は、大日や無量光などの尊格をその中に観想することで、はじめて聖別が可能になる。三昧耶薩埵の生起とそこへの智薩埵の招請、そして両者の合一が、「もの」の中に尊格を生み出すためのテクニックであるといえよう。ところで三昧耶薩埵と智薩埵の観想は、これまでも何度かふれた「成就法」と呼ばれる実践法の中に頻繁に登場する。成就法を集成した代表的な文献「サーダナー・マラー」(Sādhana-mālā)には、さまざまな時代の成就法が含まれているが、そのいくつかは智薩埵と三昧耶薩埵の観想法を説く⁷⁾。さらに興味深いのは、この両者の合一の後に、如来によるアビシェーカを説くものがあることである。たとえば金剛ターラー (Vajratārā) の成就法 (第97番) では、金剛ターラーを中心とする三昧耶マンダラを観想した後、智薩埵をひきよせ、両者を合体させる。合体したマンダラの諸尊に、五仏が瓶の水で灌頂することで、各尊の額に部族主が浮かび上がる (立川 1986: 90)。類似の記述は第239番の「マハーマヤー成就法」(Mahāmāyāsādhana)にも現れる (森

1992c: 32-33)。智薩埵と三昧耶薩埵の合一と水のアビシェーカが連続して行われるのは、プラティシュターにおいても同様であった。成就法とは行者が瞑想によって特定の尊格を生み出し、これに対しプージャーや礼拝を行ったり、尊格と精神的に一体化する行法である。観想上の尊格の実践法が、プラティシュターでは実際の尊格に対する聖別の手続きに重ね合わされているといってもよいであろう。

プラティシュターの儀式では、このように特定の尊格を呼び寄せて、これにアビシェーカと供養を実践し、さらにプラティシュターの対象の中に長くとどまることを請願する。よびよせられる尊格は対象にとどまる尊格ばかりではなく、仏、菩薩、女尊なども含まれる。ただし彼らは儀礼の最終段階でもとの世界に帰還する。このように特定の尊格を招き、何らかの儀礼行為を行い、最後にお帰りいただくという図式は、インド世界の宗教実践として広く見られるものである。特に「賓客接待」の形をとって尊格への供養を行うプージャーの儀式はその代表である。なかでも16のプロセスで儀式が構成される16ウパチャーラプージャー (śoḍaśopacārapūjā) はよく知られている⁷⁸⁾。ここで取り上げたプラティシュターでも、「プージャー」と呼んだプロセスがあったが、これは衣、花などの供物を、アビシェーカを終えた尊格に差し出す部分である。16ウパチャーラプージャーの場合、尊格を招き、供物を供えて歓待し、お帰りいただくプロセスが16からなり、全体が「プージャー」の名で呼ばれている。16ウパチャーラプージャーは宗派や伝統によってプロセスの内容は異なるが、プラティシュターで尊格に供えた衣、花、香、灯明、食物などは、いずれも供物としてもっとも一般的に現れる。そればかりではなく、瓶による尊像の沐浴であるアビシェーカや「ニーラージャナ」と呼ばれる儀礼も16ウパチャーラプージャーにしばしば登場する。また、お招きした尊格への礼拝と帰依、儀礼の不備をわびる「お許し」、尊格のご帰還は、いずれも16ウパチャーラプージャーの最後のプロセスとして必要不可欠なものばかりである。プラティシュターが尊像などの完成後に行う一回限りの儀礼であるのに対し、プージャーはそれを毎日行うという違いを別にすれば、特定の尊像に尊格を招き、沐浴(アビシェーカ)や供物による接待を行い、お帰りいただくという構図は、プラティシュターとプージャーのあいだで何ら変わりはない⁷⁹⁾。それは、先ほど述べた「成就法」でも同様である。ただしその場合、実際の尊像は用いられず、供養や礼拝を行うのは瞑想の中である。

プラティシュターの形成

このようにプラティシュターの儀礼は弟子へのアビシェーカ、成就法、プージャーという密教の儀礼や実践法と多くの共通点をもつ。それでは、プラティシュターの形成とこれらの儀礼や実践法にはどのような関係があるのだろうか。

プラティシュターも他のインドの儀礼と同様にさまざまな儀礼のユニットから形成さ

れていることは容易にみてとれる。⁸⁰⁾ 三昧耶薩埵の生起をはじめ、儀礼の概要で示した各項目は、いずれも儀礼のユニットと呼ぶことができるであろう。

九種のアビシェーカが弟子へのアビシェーカにおそらくもつづいていることはすでに述べたとおりであるが、それ以外のいくつかのプロセスも、本来は独立した儀礼であった。

たとえばニーラージャナは儀礼を行う場合の災厄を尊像から取り除くことを目的としたプロセスと考えられるが、本来は、出陣する前の王と軍馬を僧が浄めた儀礼であるといわれている。⁸¹⁾ 僧侶は夜、王や軍馬を前にして灯明を回し、そのからだに触れて戦争における災厄を取り除いた。⁸²⁾ ニーラージャナはプージャーにおいてもその一部を構成することは、すでに述べたとおりである。そこでも灯明を回すというスタイルと、災厄を取り除くという目的は維持されているが、その対象は王ではなく尊像である。

プラティシュターがユニットを合成しておそらく形成されたことは、「鏡の提示」の位置からも推測できる。弟子のアビシェーカでは、鏡の呈示に相当する「鏡のアビシェーカ」(darpanābhiṣeka) は開眼作法の後におかれていた。金の匙で眼薬を瞼に塗られた弟子は、みずからが開眼したことを鏡を見ることによって確認するのである。しかし、プラティシュターでは鏡の呈示は開眼作法の後ではなく、その直前におかれている。これでは開眼を確認するという意味を読み取ることはできない。¹⁶ウパチャーラプージャーでは、沐浴(アビシェーカ)を終えて衣裳や装身具を供えた上で、尊格にみずからの姿をご覧になっていただくために鏡を差し出す。プラティシュターで行われた鏡の呈示も、これを含むプージャーの一部分をそのままユニットとしてはめ込んだものであって、開眼作法との意味のつながりを考慮しておかれたものではないであろう。しかし、水のアビシェーカにおいて沐浴を行った後、衣裳や装身具を供えるまでに八種類のアビシェーカをさらに行うため、沐浴とプージャーとの結びつきも、ここでは読み取ることは容易ではない。

このようにプラティシュターの儀式は、儀礼のユニットを組み立てて構成された儀礼である。そしてこれらのユニットの多くは弟子のアビシェーカなどの他の儀礼と共通し、九種のアビシェーカのようにそこから流用されたと考えられるものもある。しかし、このことからプラティシュターは弟子のアビシェーカなどの他の儀礼をベースにして形成された儀礼と考えるのは性急であろう。

プラティシュターの儀礼をもっともくわしく説く文献のひとつに「マツヤ・プラーナ」がある。この文献では貯水池などのプラティシュターが第58章に、尊像などのプラティシュターが第264章以降に説かれている。⁸³⁾ この中にはVAの説明するプラティシュターのかなり多くの要素がすでに登場する。尊像のプラティシュターの方を見てみると、全体はやはり準備段階である尊格の招請と狭義のプラティシュターからなる。吉祥な月日

や星宿などを示した後で、尊像が沐浴を行う台 (vedikā) が規定される。これは四門とトーラナをそなえ、門の横には瓶が置かれる。尊像に衣や装身具を供え、金の棒で閉眼作法を行い、ゴマ、ギー、乳粥、花、香などを供える。さらに沐浴の台でパンチャガヴァと灰、水で尊像を浄め、尊像を安置する寺院の中に移す。移動後、尊像に傘蓋、払子、鏡、花輪、宝石などを差し出し、牛乳、ギー、蜜、乳粥などを供え、バリヤホーマも行う。ふたたびパンチャガヴァで浄め、クシャ草を用いて水による沐浴 (アビシェーカ) が続く。さらに種々の植物、牛糞、土、黒ゴマ、ダルバ草などでニールージャナも行われる。最後は施主自身が尊像の沐浴の残りの水で沐浴し、布施を行う。

個々の儀礼の順序は VA のプラティシュターとは異なるが、VA で行われた儀礼のユニットが、三昧耶薩埵などの観想法をのぞいて、ほとんど登場することがわかる。

前兆占いの書物として有名な『プリハット・サンヒター』にも、プラティシュターに関する章がある (第59章)。そこでも尊格の招請が準備段階に行われ⁸⁴⁾、四方にトーラナと門をそなえた台が寺院の北か東に作られる。この上で尊像をパンチャガヴァ、土、聖水などで浄め、プラクシャなどの乳木を煎じた液でも浄める。『プリハット・サンヒター』には狭義のプラティシュターに関する具体的な記述は含まれない。ヴィシュヌ派、シヴァ派などのさまざまな宗派名を列挙した後、それぞれの方法でプラティシュターを行えと記すのみである。これらの宗派の中に仏教も含まれている点は注目される。この文献の著者ヴァラーハミヒラは6世紀前半の人物とされるため、この時代には仏教独自のプラティシュターのスタイルが確立していたことが知られる⁸⁵⁾。

このように、タントリズムがインドで流行する以前の文献のプラティシュターの記述を見てみると、VA の説くプラティシュターのスタイルはかなり古い時代にすでに確立していたことが予想される。VA のプラティシュターを構成する儀礼のユニットのほとんどは、すでにプレーナ文献においてプラティシュターの構成要素として扱われていたのである。

しかし、VA のプラティシュターにのみ含まれる要素も存在する。密教独自の瞑想法である、三昧耶薩埵と智薩埵の観想法を別にすれば、九種のアビシェーカの部分が注目される。「アビシェーカ」の語は「マツヤ・プレーナ」などにも見いだせるが、その場合、瓶の水による沐浴をさして「アビシェーカ」と呼んでいた。VA では九種のアビシェーカの第一の水のアビシェーカに相当する部分である。すでに述べたように九種のアビシェーカは弟子のアビシェーカから流用された部分であろう。しかし、そのうち、水のアビシェーカのみは、すでにこれまで見た VA 以外の文献に説かれるプラティシュターの中にも含まれている⁸⁶⁾。弟子のアビシェーカからの九種のアビシェーカの転用は、プラティシュターに本来そなわっていたアビシェーカ、すなわち瓶の水による沐浴の部分を、さらに拡大するための措置ではなかったであろうか。

このことは、プラティシュターを説く他の密教文献からも推測できる。プラティシュターをあつかった独立した密教文献はそれほど多くはないが、いくつか存在する。これらの文献はヴァーギーシュヴァラキールティ (Vāgīśvarakīrti)、クリシュナ (Kṛṣṇa)、チャンドラプラバ (Candraprabha)、バーヌチャンドラ (Bhānucandra) などの著者名をもつ。⁵⁷⁾そこに説かれるプラティシュターは、全体の構成や引用されるマントラ、偈頌などはVAとよく一致するが、VAと同じ九種のアビシェーカが含まれるものは一点も確認できず、いずれもアビシェーカの部分では瓶の水による沐浴のみを行うよう指示する。

VAが紹介する簡略なプラティシュターもこのことに関連するであろう。簡略なプラティシュターは、三昧耶薩埵の生起とこれへの智薩埵の挿入、合体、瓶の水によるアビシェーカ、プージャー、そして尊格のマントラの誦唱からなっていた。ここからわかるように、簡略なプラティシュターにおいても、九種のアビシェーカの第一の水のアビシェーカのみは行われた。これは念珠のプラティシュターや貯水池、庭園などのプラティシュターにおいても同様である。簡略なプラティシュターは通常のプラティシュターから必要なプロセスのみを取り出したものであろうが、アビシェーカとして瓶の水による沐浴のみは必ず行われたということは、このプロセスが、より古い時代からすでに行われていた、この儀礼の中核部分であったことを暗示している。このことは、「水をそそぐ」という「アビシェーカ」の本来の意味や、水のもつ再生の機能を考えれば、むしろ当然かもしれない。⁵⁸⁾

もともとは瓶の水による沐浴のみであったアビシェーカの部分を肥大化させた理由は明確ではない。すでに述べたようにプラティシュターは弟子のアビシェーカと多くの共通点をもった儀礼である。そればかりではなく、VAの著者であるアバヤーカラグプタは、プラティシュターの儀軌の中で「弟子のプラティシュターのように尊像のプラティシュターを行え」という言葉を二回引用していた。アビシェーカの部分の肥大化は、弟子のプラティシュター、すなわちアビシェーカをモデルにして尊像のプラティシュターを行えという指示に忠実に従ったための措置であったのかもしれない。

しかし、同時にアバヤーカラグプタは、「なぜ尊格に対してアビシェーカが必要なのか」という問いも提示している。プラティシュターの対象である尊像には聖別のプロセスが必要であっても、そこに招請される尊格はすでに聖なる存在であるという意識があったのであろう。この部分は前章では触れなかったが、アバヤーカラグプタはディーバンカラバドラ (Dīpaṅkarabhadra) の『マンガラ儀軌四百五十頌』⁵⁹⁾や經典の言葉を引用しながら、水以下の九種のアビシェーカがなぜ必要であるかを説明している。そして最後に、すでに述べた「弟子のプラティシュターのように尊像のプラティシュターを行え」と、偉大なものたち (mahāratha) はご真意から明言しているのだと述べて締めくくる。こ

の部分からは、すでにアビシェーカが弟子のイニシエーションを指す言葉であって、それを尊格に用いることに、アバヤーカラグプタ自身、違和感があったことを読みとることができる。

4. おわりに

インド後期密教の儀礼文献 VA を手がかりにして、尊像や僧院などの完成段階で行われるプラティシュターの儀式についてみてきた。

プラティシュターは準備段階である尊格の招請と狭義のプラティシュターの二つの部分からなり、さらに多くの儀礼のユニットから構成されていた。プラティシュターの方法は、対象となる尊像や建造物などによって異なり、さらにプラティシュターの対象はその内部に招請される尊格や、準備されるマンダラの種類も規定する。このほかに貯水池や庭園などのプラティシュターもそれぞれ独自の方法で行われた。また、通常のプラティシュターとは別に、簡略なプラティシュターと呼ばれる方法も紹介されている。

プラティシュターの儀礼を構成するユニットは、弟子のアビシェーカ、成就法、プージャーなどの他の密教儀礼や実践法とも多く共通し、これらの儀礼が平行して形成されたことが予想される。しかし、密教儀礼としてプラティシュターが整備される過程では、ユニットを組み合わせるときの順序や、一部のユニットの内容が変更されたり、精神的な行法が加えられたにすぎず、プラティシュターの儀礼のスタイルは、仏教への導入以前からすでに確立していたと考えられる。

密教儀礼としてのプラティシュターは、これまでほとんど注目されなかった儀礼である。しかし、弟子へのアビシェーカとの比較で見たように、他の密教儀礼の形成に深く関与していたことが知られる。⁹⁰⁾アビシェーカと同じくマンダラを必要とする儀礼であり、宗教実践上のマンダラの機能を考える際にも視野に入れなければならないであろう。密教内部のプラティシュターの形成と変化をたどるためには、さらに多くの文献との比較検討が必要であろうが、プラティシュターに関する研究は、単なる一密教儀礼の実態の解明にとどまらず、密教の儀礼体系の全体を明らかにする重要な手がかりになるであろう。

付 記

本稿は平成七年度文部省科学研究費補助金による国際学術研究「マンダラの理論と実践の比較研究」(研究代表者・立川武蔵、課題番号0504013)による研究成果の一部である。

註

- 1) ヴァラーハミヒラ Varahamihira による6世紀の占術文献「プリハット・サンヒター」(*Brhatsamhitā*)の邦訳(矢野・杉田 1995:284-288)では「安置式」という語がプラティシュ

101 インド密教におけるバリ儀礼 (森)

ターに用いられている。ヴェーダ文献以来の「プラティシュター」の語の意味と用例については Gonda (1975) が詳しい。ここで取り上げる儀式としてのプラティシュターについては pp.371-2 に言及がある。ヒンドゥー・タントリズムでは「プラティシュター」の語は、瞑想における意識の階梯の一つを指す用語としても用いられているが (Gupta *et al* 1979: 61, 85-6)、これについては本稿ではあつかわない。

- 2) Tucci (1980: 308-316) はパンチェン一世 (Blo bzang chos kyi sgyal mtshan) によるプラティシュターの儀軌 *Rab tu gnas pa'i cho ga lag len du dril ba dge legs rgya mtsho'i char 'bebs* にもとづいて儀礼の紹介を行っている。この中で Tucci はプラティシュターの起源をインドのプラーフマナ文献にまでさかのぼらせている。またプラティシュターの儀式を「誕生」と「王位継承」の二つの枠組みでとらえている。これらの指摘には重要な示唆が含まれているが、インド密教のプラティシュターの成立を考える場合、当時の密教徒が直接参照したと考えられるヒンドゥー儀礼との対比など、より厳密な比較研究が必要であろう。この小論もその試みのひとつである。
- 3) VA の書誌学的情報は森 (1991a, 1991c) 参照。VA はサンスクリット写本が現存するが、校訂テキストは刊行されていない。ここでは、現存する写本から筆者が校訂したエディション (未刊) を用いた。またチベット訳テキストとして、北京、デルゲ、ナルタン の三版を参照した。VA の該当箇所は、便宜上、北京版のチベット訳テキストの頁、葉、行で指示した。なお、一部の注では行番号を省略し、頁と葉のみを示した。
- 4) VA の主要な三つのトピックとそれ以外の小儀礼の関係、および VA の全体の構成については森 (1995) 参照。
- 5) VA に説かれるプラティシュターの儀式の概要と構造については、森 (1996) において論じた。
- 6) TTP, Vol.80, 107.4.
- 7) 次の「尊像などのプラティシュターの儀軌」の中にも同じ文章が「偉大なもの (mahāratha) たちの言葉」として引用されている。
- 8) チベット訳は「尊像などが空性であることを念想した後に、種子などから完成した三昧耶薩埵か、もしくは瞬間的でもよいので胸の種子をともなった三昧耶薩埵を想起し」。
- 9) 「誓水の授与の儀軌」(samayodakadanavidhi) に含まれる。森 (1992b: 19) 参照。
- 10) チベット訳は「2ハスタ」(khru gnyis pa)。
- 11) プラティシュターを行う時機は厳密に定められていたらしい。プラーナ文献の中でも詳細なプラティシュターの記述を含む「マツヤ・プラーナ」(*Matsyapurāna*) には、プラティシュターに適した吉祥な月、日、星宿などが儀軌のはじめに規定されている (Wilson 1983: 1139)。『プリハット・サンヒター』にもプラティシュターを行う時期への言及がある。チベットの伝承であるが、プトン Bu ston は6月の第4曜 (木曜)、星宿は第14宿 (角宿)、7日が適当であるとプラティシュターの儀軌の中で述べている (Lokesh Chandra 1968: 481.7-482.1)。
- 12) 具体的には何を指しているのか不明。すでに作成した彩色マンダラの内陣を指すのか？
- 13) 12ハスタの壇の場合、高さは約3mにもなる。これを制作するためにはかなりの労力が必要とされたと考えられるし、その上にプラティシュターの対象を移動するための技術も必要

- であったであろう。しかし、VAには具体的な記述はなく、詳細は不明である。
- 14) Kane (1974: 897)によればプラティシュターの対象が移動可能か否かで、プラティシュターの儀式は「移動可能な尊像の儀式」(calarca)と「固定された尊像の儀式」(sthirarca)の二種に分類される。
- 15) 「三昧耶薩埵の生起」の部分を目指す。
- 16) チベット訳は「早朝に」(tho rangs kyi dus su)。
- 17) パードヤは足を洗う水、アルガは敬意を示すために差し出す水である。このほかに口をそそぐ水アータマナ(acamana)もある。これらの水については森(1991b)参照。
- 18) Skt. om sarvapāpadahanavajrāya vajrasattvasya sarvapāpaṃ daha svāhā. 『真実撰経』(Tattvasaṃgraha)の降三世品に類似のマントラ(om sarvapāpadahana svāhā)が登場する(堀内1983: 467)。
- 19) Tib. spos dkar gyi bdug paṣ. Edgertonの*Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary* (1977)は「何らかの香料」とするのみで、具体的な名称はあげていない。
- 20) 『プリハット・サンヒター』には、プラクシャ、アシュヴァッタ、ウドウンバラ、シリーシャ、パニヤンから作った煎じ薬を神像に塗るという記述が含まれる(矢野・杉田 1995: 285)。
- 21) Skt. om sarvatathāgata kāyaviśodhane svāhā. 類似のマントラが*Supraṭiṣṭhāntasamgraha* (TTP, No.118, Vol. 5, 122.4.5)に含まれる。
- 22) Skt. amarakṣi, Tib. sgyu ru ra. 詳細は不明。
- 23) この偈の全文は「尊像などのプラティシュター」の中の第3節「水のアビシェーカ」に登場する。
- 24) 第10儀軌「瓶の招請の儀軌」によれば、文殊金剛を中尊とする秘密集会マンダラの場合、瓶の数は20, 15, 10, 6, 2, 1の六つの説がある(TTP, Vol.80, 88.3)。
- 25) この偈頌はすでにVAの中に登場している。VAには第16儀軌と同じ「尊格の招請」の名をもつ儀軌が第11番目にもある。第16儀軌がプラティシュターの対象への尊格の招請であるのに対し、第11番目ではマンダラの墨打ちを始める前に、その場にマンダラの尊格を招請する。このために同一の偈頌が唱えられるのであるが、第16儀軌で「プラティシュターを行います」と唱える部分が、第11儀軌では「マンダラを描きます」になっている。
- 26) Skt. om vajra punar āgamanāya muḥ.
- 27) バリについては森(1994b)参照。
- 28) 前章の第2節「三昧耶薩埵の生起」を目指す。
- 29) 成就法の文献としては『サーダナ・マラー』(Sādhana-mālā)が有名であるが、このほかにも数多くの文献が流布していたのであろう(たとえばBühnemann 1994)。『サーダナ・マラー』自体、長い年月を経て形成されたことが知られている(奥山 1988)。「現観」という語を含む密教文献については谷口(1988: 43)に言及がある。
- 30) 尊格の招請の中のニールージャナと沐浴のプロセスを目指す。
- 31) 前章の「五甘露の塗布」の内容を目指す。
- 32) 「招請と親誓の祈願」のはじめの段落を目指す。
- 33) Skt. om aḥ sarvatathāgatābhīṣeka samaya śriye hūṃ svāhā.

99 インド密教におけるバリ儀礼 (森)

- 34) Skt. om vajrodakabhiṣiṅca hūm.
- 35) TTP, Vol.80, 116.4に登場する。
- 36) 「オーム、アーハ、金剛よ、アビシェーカを行え、フーム」(om āḥ vajrābhiṣiṅca hūm.) 「オーム、金剛の宝よ、アーム」(om vajraratna am) 「オーム、フーム、トラーム、フリーヒ、アハ」(om hūm trām hriḥ āḥ) という三つのマントラのいずれかが唱えられる。チベット訳は第二のマントラの最後の種子マントラが am ではなく om である。
- 37) この偈頌は、弟子へのアビシェーカの一つ「金剛のアビシェーカ」にも登場する (TTP, Vol.80, 117.1)。
- 38) Skt. om vajrādhipati tvām abhiṣiṅcāmi tiṣṭha vajra samayas tvam. 同一のマントラが弟子へのアビシェーカの一つ「鈴のアビシェーカ」にも登場する (TTP, Vol.80, 117.1)。
- 39) Skt. om vajrasattva tvām abhiṣiṅcāmi vajranāmābhisekataḥ om amukavajras tvam. 同一のマントラが弟子へのアビシェーカの一つ「名前のアビシェーカ」にも登場する (TTP, Vol.80, 117.1-2)。
- 40) Tib. mngon par bkruṣ te (沐浴申し上げ)。
- 41) Skt. om supraṭiṣṭha vajre svāḥa. 同一のマントラが弟子へのアビシェーカの一つ「阿闍梨のアビシェーカ」にも登場する (TTP, Vol.80, 117.5)。
- 42) Skt. om hūm hriḥ bhrūm khaṃ vajribhava dr̥ḍham tiṣṭha bhrūm khaṃ.
- 43) Skt. om āḥ vajravāsase hūm svāḥa.
- 44) Skt. om āḥ sarvābharānavibhūṣane svāḥa.
- 45) Skt. om āḥ sarvaśodhani hūm phat.
- 46) Skt. om jaṃ svāḥa.
- 47) Skt. om vajrasattva āḥ.
- 48) マーシャカ (māsaka) は金の重さを示す単位であるが、詳細は不明。
- 49) Skt. om cakṣuṣ cakṣuḥ samantacakṣur viśodhane svāḥa.
- 50) Johnston (1972), Fausböll (1877: 68) など参照。パーリ語では 'payasa' である。乳粥はその他、牛の安寧と多産のための儀式でも用いられたり (Gonda 1980: 183)、祖霊に供えられる食物のひとつとして『マヌ法典』(Manusmṛiti) に言及される (渡瀬 1991: 120)。「マヌ法典」は、家長に食べることを禁じた食物のひとつとしても乳粥をあげる (渡瀬 1991: 162)。
- 51) Skt. om divyāṇe samādhidhyānapriṇane svāḥa.
- 52) Tib. me tog mchod pa la sogs (花の供養など)。
- 53) 同一の偈頌が *Supraṭiṣṭhatantrasaṃgraha* (TTP, Vol.5, 122.3.3-4) に含まれる。
- 54) Tib. don yod grub pa (不空成就)。
- 55) 同一の偈頌が *Supraṭiṣṭhatantrasaṃgraha* (TTP, Vol.5, 123.2.1-2) に含まれる。
- 56) Skt. namo bhagavate śākyamunaye tathāgatāyār̥hate samyaksambuddhāya om mune mune mahāmunaye svāḥa ye dharmā hetuprabhavā hetuṃ teṣāṃ tathāgato hy avadat teṣāṃ ca yo nirodha evaṃ vādi mahāśramaṇaḥ.
- 57) Skt. om mantradhātugarbhāya svāḥa.
- 58) Skt. om vajradhātugarbhāya svāḥa.

- 59) チャイトヤヤストゥーバが、釈尊の荼毘の後にその遺骨を納めて作られた記念碑であることはよく知られているが(宮治 1992:21-2)、仏塔に聖者の遺骨を納める習慣がインド後期密教においても継承されていたことが、この記述から知ることができる。立川(1984)にはチベット系のタマン人が高僧の遺骨を入れた仏塔(チョルテン)を建立した様子が紹介されている。
- 60) 力(bala)は如来の十力、無畏(abhaya)は如来の四無所畏を指す。「など」というのは如来の他の性質である「十八不共道」や「三十二種大悲」などを指すのであろう。
- 61) Skt. akṣyarukāraṇuru aso hi amantavisāru gani a asaṃ khu ali kku sihya itatta visāru om pade pade mahājñānaṃ sarvabuddham ahaṃ bhava hūṃ hūṃ ho ho ho aḥ khaṃ svāhā.
- 62) アバヤーカラグプタは第18儀軌の名称として「貯水池(puṣkarīṇi)、池(vāpi)、井戸(kūpa)のプラティシュター」と、三つの設備をあげている。Kane(1974:893)は「マツヤ・プラーナ」第58章の類似の儀軌にもとづき、これらの三つの名称は、規模の違いによって使い分けられると述べる。すなわちvāpiはkūpaの十倍、puṣkarīṇiはvāpiのさらに十倍の大きさをもつ。
- 63) Skt. om vajra samayas tvam.
- 64) Skt. kallokaṃkalayeta paritah; Tib rlab kyi phreng ba dang ldan pa kun tu bsgom par bya'o. サンスクリット・テキストは「波の帯のようにせよ」という意味か?
- 65) 金剛ヴァルナは「貯水池などへのアルガの儀軌」(puṣkarīṇyadyarghavidhi)にすでに登場している。この儀軌ではプラティシュターを行う貯水池などを制作する前に行う儀礼が説かれる。そこでも金剛ヴァルナは大日と同一視されている。
- 66) ナーガ(竜王)の像を作ったり描いて池におく儀式は、請雨法や止雨法の儀軌の中にも見ることができる。森口(1971)参照。ナーガや亀、魚などの水に棲む生物の像を作る方法は、「マツヤ・プラーナ」の第58章「貯水池などのプラティシュター」の儀軌にも登場する(Wilson 1973:273)。
- 67) Skt. om aḥ vajravaruṇāya hūṃ svāhā.
- 68) Skt. om aḥ anantāya hūṃ svāhā.
- 69) 鎌首の形(phaṇābhinaya)は第7儀軌「土地の掌握の儀軌」の中で説明されている(TTP, Vol.80, 86.2)。
- 70) Skt. om ananta vāsuki takṣaka karkoṭaka padma mahāpadma saṅkapāla kulika pāla devati mahādevati somaśikhi mahāsikhi daṇḍadhara mahādaṇḍadhara apalālahuṇḍa nandopananda sāgara mahāsāgara tapta mahātapta śrikānti mahākānti ratnakānti surūpa mahāsurūpa bhadrāhika mahodara śīli mahāśīli om bhakṣa āgaccha āgaccha mahānāgādhipati sarva bhūṛ bhuvah phum phum svāhā.
- 71) 再生族の四住期の第二期を終えたものごとを「ウパクルヴァーナ」と呼ぶが、なぜここで言及されているのか筆者には明らかではない。
- 72) おそらくこれは、ヨーガ・タントラ以降の大日と仏塔との密接な関係にもとづくものであろう。密教における仏塔については乾(1993)参照。
- 73) 第21章の法界語自在マンドラの中尊マンジュゴーシャも、大日に同一視されている。

97 インド密教におけるバリ儀礼 (森)

- 74) 森 (1994a: 133) 参照。無量光と同じ蓮華部の代表的な尊格である観音 (世自在) を中尊とする秘密集会マンダラは、チベットでも流行したらしい (田中 1987: 198-9)。
- 75) このマンダラの中尊は金剛薩埵ではなく、阿閼であるが、アバヤーカラグプタは阿閼と金剛薩埵の同一性を第2章の冒頭で示している (森1994a: 130)。
- 76) VA のアビシェーカの儀式については森 (1992b) 参照。VA のアビシェーカが『時輪タントラ』の影響を受けていることは田中公明氏よりご教示いただいた。田中 (1994: 122-145) も参照。
- 77) トウッチ (1984: 151)、肥塚 (1967: 70)、清水 (1977: 70; 1992)、立川 (1986: 89-90)、奥山 (1992: 231-3)、佐久間 (1993) など参照。
- 78) 16ウパチャーラプージャーについては Kane (1974: 729-735)、Tachikawa (1983)、Bühnemann (1988) 参照。プージャー一般については松原 (1967) も参照。
- 79) プラティシュターを終えた尊像には毎日定刻にプージャーを行わなければならない。これは「常なるプージャー」(nityapūjā) と呼ばれる。
- 80) インドの儀礼がユニットから形成されていることは Staal (1979) 参照。
- 81) Gonda (1969: 120-122) 参照。ニーラージャナについては Losch (1959) による研究があることが Bühnemann (1988: 170) などによって紹介されているが、入手し得なかった。横地 (1993: 107) はヒンドゥー女神マヒシャースラマルディニー (Mahiṣasuramardini) の図像の形成にニーラージャナが関わったという仮説を提示している。
- 82) ニーラージャナを終えた王は、インドラのように都城の北東に軍隊を進める (Gonda 1969: 120)。都城をマンダラに置き換えれば、王の動きはプラティシュターにおける尊像などの動きに一致して、興味深い。
- 83) テキストは Wilson (1983: 271-8, 1183-1155)。この部分の要約は Kane (1974: 897-9) にも含まれる。Hazra (1975: 47) は、この二つの部分と『プリハット・サンヒター』のプラティシュターの章 (第59章) との比較から、『マツヤ・プラーナ』の第58章が550年以降、第264章から267章が1100年以前の成立であるとする。ただし『マツヤ・プラーナ』の成立年代には必ずしも定説があるわけではない (Rocher 1986: 199)。
- 84) 『プリハット・サンヒター』(矢野・杉田 1995: 288) の邦訳では 'adhivasana' は「前夜式」と訳されている。
- 85) しかし、インドにおける仏像の出現が紀元2世紀頃といわれ、ストゥーパや僧院の建立はさらにそれよりも前の時代から行われていたことを考えれば、6世紀の時点で仏教独自のプラティシュターの方法が存在していたことは、むしろ当然であろう。
- 86) 現代のヒンドゥー教寺院の完成式には、「プラティシュター」の語よりも「アビシェーカ」が用いられることが多い。また、周期的に神像に「シャクティ」(sakti) を吹き込むために行われる儀礼も「アビシェーカ」と呼ばれる。このような儀礼は田中 (1986) において紹介されているが、そこでは神像に五甘露、樟脳、牛乳、水、ココナツの汁、ゴマ油、カード、聖水、聖なる灰、白檀のペーストなどが次々にそそがれたり、塗られたりする。これらの多くはここで取り上げたプラティシュターの沐浴やアビシェーカにおいても用いられた。この他、山下 (1992) にも類似の儀礼が紹介されている。

- 87) TTP, Nos. 3952, 2686, 2760, 2768.
 88) 宗教的な文脈における水のもつ意味や機能については森 (1991b) 参照。
 89) VA と『マンダラ儀軌四百五十頌』については森 (1992a) 参照。
 90) 弟子へのアビシェーカの起源は、これまで「古代インドにおける国王の即位儀礼」というのが通説になっているが、沐浴した弟子が仏位を獲得するという構図は、むしろ沐浴によって尊像がその尊格そのものとして誕生するプラティシュターに求めた方が妥当ではないだろうか。

略号表

VA: *Vajrāvali*

TTP: Tibetan Tripitaka, the Peking edition (『影印版北京版西藏大蔵経』鈴木学術財団)。

参考文献

- 乾 仁志 1993 「バングラデシュの密教遺跡—特に塔を中心として」『高野山大学密教文化研究所紀要』6: 166-198。
 奥山直司 1988 「チベット仏教バンテオン形成に関する二つの課題」『印度学仏教学研究』36(2): 94-100。
 奥山直司 1992 「インド後期密教における教理と造型—devatā とそのイコンをめぐる」『日本仏教学会年報』57: 223-236。
 肥塚 隆 1967 「瞑想と造型」『南都仏教』20: 60-79。
 佐久間留理子 1993 「『サーダナ・マーラー』におけるジュニャーナサットヴァとサマヤサットヴァ」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集インド学密教学研究』法蔵館、pp.793-807。
 清水 乞 1977 「インド宗教儀礼と造型—『サーダナ・マーラー』を中心として」『日本仏教学会年報』43: 59-72。
 清水 乞 1992 「密教儀礼におけるイメージの重層性」『日本仏教学会年報』57: 237-250。
 立川武蔵 1984 「ネパールにおける塔崇拜」前田惠學編『現代南アジアにおける仏教を囲む社会的文化的環境の研究』昭和58年度文部省科学研究費補助金研究成果報告書、pp.63-79。
 立川武蔵 1986 「金剛ターラーの観想法」『論叢仏教美術史』(町田甲一先生古稀記念会編) 吉川弘文館、pp.65-97。
 田中公明 1987 「曼荼羅イコノロジー」平河出版社。
 田中公明 1994 「超密教時輪タントラ」東方出版。
 田中雅一 1986 「礼拝・アビシェーカ・供養—浄・不浄から力へ: スリランカのヒンドゥ寺院儀礼」『民族学研究』51(1): 1-31。
 谷口富士夫 1988 「現観の智慧と対象—『現観莊嚴論』における一刹那の覚知」『宗教研究』62(3): 41-59。
 トウッチ、ジュゼッペ 1984 「マンダラの理論と実践」ロルフ・ギーブル訳 平河出版社。
 堀内寛仁 1983 「初会金剛頂経の研究」(上) 高野山大学密教文化研究所。
 松原光法 1967 「ヴィシュヌ教における最高神崇拜」『講座東洋思想 第1巻 インド思想』

95 インド密教におけるバリ儀礼 (森)

東京大学出版会、pp.312-332。

宮治 昭 1992 「涅槃と弥勒の図像学」吉川弘文館。

森 雅秀 1991a 「Abhayākara Gupta のマンダラ儀軌 *Vajrāvati*」『印度学仏教学研究』39(2) : 197-199。

森 雅秀 1991b 「インド密教儀礼における水」『国立民族学博物館研究報告』15(4) : 1013-1047。

森 雅秀 1991c 「インド密教における建築儀礼— *Vajrāvati-nāma-mandalopāyikā* 和訳(1)」『名古屋大学文学部研究論集』111 : 53-73。

森 雅秀 1992a 「『ヴァジュラーヴァリー』と『マンダラ儀軌四百五十頌』」『印度学仏教学研究』40(2) : 188-191。

森 雅秀 1992b 「インド密教における入門儀礼」『南アジア研究』4 : 15-32。

森 雅秀 1992c 「マハー・マーヤーの成就法」『密教図像』11 : 23-43。

森 雅秀 1993 「アバヤーカラグプタの灌頂論」『印度学仏教学研究』41(2) : 234-242。

森 雅秀 1994a 「『完成せるヨーガの環』第1章『文殊金剛マンダラ』訳およびテキスト」『高野山大学密教文化研究所紀要』7 : 113-142。

森 雅秀 1994b 「インド密教におけるバリ儀礼」『高野山大学密教文化研究所紀要』8 : 174-204。

森 雅秀 1995 「インド後期密教の儀礼文献の構成」『南アジア、東南アジアにおける宗教、儀礼、社会—「正当」、ダルマの波及・形成と変容」(Monumenta Serindica No.26) 石井溥編 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、pp.19-34。

森 雅秀 1996 「インド密教におけるプラティシュターの構造」『印度学仏教学研究』44(2) (印刷中)。

森口光俊 1971 「請雨壇法の展開」『智山学報』19 : 227-255。

矢野道雄・杉田瑞枝 1995 「占術大集成—古代インドの前兆占い1」平凡社。

山下博司 1992 「アイヤナール寺院複合のクンバービシェーカ (序説)」『印度学仏教学研究』40(2) : 49-54。

横地優子 1993 「*Devīmāhātmya* における戦闘女神の成立」『東洋文化』73 : 87-120。

渡瀬信之 1990 『マヌ法典』(中公文庫) 中央公論社。

Bühnemann, G. 1988 *Pūjā : A Study in Smārta Ritual*. Vienna : Institut für Indologie der Universität Wien.

Bühnemann, G. 1994 **Sādhanaśataka and *Sādhanaśatapañcaśika : Two Buddhist Sādhana Collections in Sanskrit Manuscript*. Wien : Institut für Indologie der Universität Wien.

Fausböll, V. 1877 *The Jātaka together with its Commentary*, Vol.1. London.

Edgerton, F. 1977(1953) *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*, Vol. II. Delhi : Motilal Banarsidass.

Gonda, J. 1969 *Ancient Indian Kingship from the Religious Point of View*. Leiden : E. J. Brill.

Gonda, J. 1975(1954) *Pratiṣṭhā*. In *Selected Studies*, Vol. II. Leiden, E. J. Brill, pp.338-374.

Gonda, J. 1980 *Vedic Ritual : The Non-solemn Rites*. Leiden : E. J. Brill.

Gupta, S., D. J. Hoens & T. Goudriaan 1979 *Hindu Tantrism*. Leiden : E. J. Brill.

Hazra R. C. 1975(1940) *Studies in the Purānic Records on Hindu Rites and Customs*. Delhi : Motil-

- al Banarsidass.
- Johnston, E. H. 1972 *The Buddhacarita or Acts of the Buddha*. Delhi : Motilal Banarsidass.
- Kane, P. V. 1974 *History of Dharmaśāstra*. Vol. 2 (2 parts). Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute (2nd ed.).
- Lokesh Chandra (ed.) 1968 *The Collected Works of Bu-ston*. Part 12 (Na). New Delhi : International Academy of Indian Culture.
- Losch, H. 1927 Nirājana. In *Beiträge zur indischen Philologie und Altertumskunde. Walther Schubring zum 70. Geburtstag*. Hamburg, pp.51-58.
- Matsunaga, Yukei 1978 *The Guhyasamāja Tantra, A New Critical Edition*. Osaka : Toho Shuppan Inc..
- Rocher, L. 1986 *The Purāṇas*. History of Indian Literature, Vol II , Fasc. 3. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- Staal, F. 1979 The Meaninglessness of Ritual. *Numen* 26 : 2-22.
- Tachikawa, Musashi 1983 A Hindu Worship Service in Sixteen Steps. *Shoḍaśa-upacārapāḍā. Bulletin of the National Museum of Ethnology* (Osaka) 8 (1) : 104-186.
- Tucci, G. 1980(1949) *Tibetan Painted Scrolls*. Kyoto : Rinsen.
- Wilson, H. H. 1983(1916-7) *The Matsyamahāpurāṇam*. Delhi : Nag Publishers.
- <キーワード>
ブラティシュター、Vajrāvalī、Abhayākaragupta